

東洋學報

第貳拾壹卷第三號

昭和九年四月

論說

豢龍氏御龍氏に就いての臆說

白鳥清

龍態の起源を攻究するに當つて、拙文「龍の形態に就いての考察」の條で列舉して置いた文獻以外に、此處に一種異様な叙述であり、従つて普通としては頗る難解と思惟される内容を含んでゐる古典の文字がある。即ち左傳に、

秋龍見于絳郊、魏獻子問於蔡墨曰、吾聞之蟲莫知於龍、以其不生得也、謂之知信乎、對曰、人實不知、非龍實知、古者畜龍、故有豢龍氏、有御龍氏、獻子曰、是二氏者、吾實聞之、而不知其故、是何謂也、對曰、昔有鬻叔安有裔子曰董父、實甚好龍、能求其著欲、以飲食之、龍多歸之、乃擾畜龍以服事帝舜、舜賜之姓曰董氏、曰豢龍、封諸鬻川、鬻夷氏其後也、故帝舜氏世々有畜龍、及有夏孔甲、擾于有帝、帝賜之乘龍、河漢各二、各有雌雄、孔甲不能食、而未獲豢龍氏、有陶唐氏既衰、其後

豢龍氏御龍氏に就いての臆說

第二一卷

三〇七

有劉累學擾龍于篆龍氏、以事孔甲、能飲食之、夏后嘉之、賜氏曰御龍、以更豕韋之後、龍一雌死、
 潛醢以食夏后、夏后饗之、既而使求之、懼而遷於魯縣、范氏其後也、

と見える記述と、史記に、

帝廬崩、立帝不降之子孔甲、是爲帝孔甲、帝孔甲立、好方鬼神、事淫亂、夏后氏德衰、諸侯畔之、天
 降龍二、有雌雄、孔甲不能食、未得篆龍氏、陶唐既衰、其後有劉累學擾龍于篆龍氏、以事孔甲、孔
 甲賜之姓、曰御龍氏、受豕韋之後、龍一雌死、以食夏后、夏后使求、懼而遷去、

とある叙述がそれである。⁽⁴⁾

却説、此等左傳の記載及び史記の叙述の中に、從來其の方面專攻の學者に依つて充分な解
 釋説明がされてゐないと考へられるものは、篆龍氏と御龍氏とであらう。自分は先きに龍
 の形態を論じた條に於いて、龍態の起源は雲雨を掌る天空の靈を表現化したもので、所謂思
 想的な所産であらうといふ臆説を提出して置いたが、其の臆説を更に有力なもの、強固なも
 のたらしめんが爲めに、篆龍氏及び御龍氏に就いても、以下に愚見を披瀝して見たいと思ふ。

處で前掲の此等左傳史記の文面に於いて、其處に或は陶唐であるとか、或は舜であるとか、
 或はまた禹の子孫の孔甲であるとかいふ所謂古帝王の名稱が散見してゐるので、それだけ
 此等の物語に表示されてゐる年代は漠然たるものになるが、兎に角、堯舜禹頃の物語である
 といひ得ることは解る。併し從來儒敎學者間に其の存在を固く信じられた堯舜禹時代は、
 先輩の研究した結果、傳説時代であるといふことが定説となつたのであるから、従つて堯舜

禹頃のものとして取扱はれてゐる物語もまたこれを神話傳説と見なければならなくなるし、傳説時代とされてゐる堯舜禹時代は歴史的存在的價值を持たなくなり、堯舜禹として聖人視されたそれ等の人々も、實在的な歴史的人物と観することは出来ないのである。そこで帝舜に服事して參龍氏と姓を賜はられた董父であるとか、夏帝孔甲に臣事して御龍氏と姓を賜はられた劉累であるとかいふ人物も、到底歴史的實在性のあるものと見ることは出来ないのである。併し縱令へ參龍氏御龍氏を歴史的實在性の乏しい人物と思惟し、また其の物語を神話傳説の一種と觀じ、或は後人の作爲した説話の類であると考察するとしても、其の神話傳説の中に反映してゐる思想、其の説話に潤色を施した説話作者の觀念などは、それを思想的事實として、其の傳説、其の説話を作爲した作者時代のものに restore することは、必ずしも不可能事では無いと愚考される。

元來龍なるものは、往古より現今に至るまで何人も未だ實際に見聞した者もなく、また捕獲した者も無いと惟はれるのに、傳説時代とされてゐる堯舜禹頃の古代支那に於いて、其の龍なるものをよく畜養する能力を有つてゐた參龍氏が存在してゐたとか、自由に統御する術策を心得てゐた御龍氏なるものが居つたといふ説話があり、物語が存するので、其處に自然と觀念上に憧憬が起り、矛盾が生じ、爲めに上掲の説話文獻が、實際に則してゐない不可解な記載となつて來るのである。古來幾百年來萬人に首肯されるやうな明快な解説が與へられてゐないのは、一方に龍なる動物？を見聞した者が無いにも拘らず、他方に龍なるもの

の存在を語る文獻を信じて、篆龍氏御龍氏の物語を解釋せんとした處に、その原因が胚胎してゐたのではなからうかと思はれる。

そこで此の龍なるものは、よし實際此世に存在するものではないとしても、兎に角美術方面と言はず、工藝方面を論ぜず、または龍顏麗はしなどと天子の意に龍を用ひたりなどして、思想的の方面にも此の龍が關係を有つてゐるのであるから、吾々古代文化の討究者にとつては、此の龍の正態を研めることが旋て古代支那文化研究に大なる貢獻を爲すことが出来ることゝ思はれるので、困難ではあるが、頗る興味ある問題であり、且つ必要なことである。それ故に吾々は決して之れが研究を等閑視すべきものではない。

然し困難な問題も或る point を了解することが出来るならば、自然に説明し得らるゝものであるが、それは恰度此の龍の正態を知ることには就いても當嵌められるので、篆龍及び御龍の意味を明瞭になし得るならば、篆龍氏御龍氏などが畜養したり統御したりしてゐた龍は如何なるものであつたかを説明することが出来、從つて龍態の起源は自然と腦裡に浮んで來ることゝならう。

いま其の目的を持つて、先きに掲げた左傳の記載と、史記の文面の共通な點を比較して見ると、左傳に、

及有夏孔甲、擾于有帝、帝賜之乘龍、河漢各二、各有雌雄、

とある處で、史記には、

帝孔甲立、好方鬼神事、淫亂。夏后氏德衰、諸侯畔之。天降龍二、有雌雄、

とあるが、史記の方の文意では、夏帝孔甲が鬼神に事へることを好み、其の行爲また淫亂であつたので、夏后の徳は衰へ、諸侯は之れに畔くに至つたから、天帝は二對の龍を降したとなつてゐるのに、左傳の文には別に孔甲が鬼神を好むとか、淫亂であるとかいふ條はないが、擾于有帝の句にそれが含まれてゐるのであつて、矢張り夏帝孔甲が天帝の心を擾す行爲をしたので、天帝は二對の龍を降してそれを孔甲に賜はつたと見る可きであらう。さすれば、此等の左傳史記の文面では、天帝によつて降下された龍は、徳の衰へた夏后を誡飭する爲めと見られる。史記の周本紀に、周太史伯陽讀史記曰、周亡矣、昔自夏后氏之衰也、有二神龍止於夏帝庭、而言曰、余褒之二君とある記述を參照して見ると、帝徳の衰微した時に天帝が龍を降すといふ思想の存してゐたことが解る。

處で史記、封禪書には、

舜五載一巡狩、禹、湯之後十四世、至帝孔甲、淫徳好神、神潰、二龍去之、

といふ句があり、博物志にも、

穿胥國昔禹平天下、會諸侯、會稽之野、防風氏後到、殺之。夏徳之盛、二龍降之。禹使范成光御之行域外、既周而還、至南海、經防風氏之二臣、以塗山之戮見禹、使怒而射之、迅風雷雨、二龍昇去、二臣恐、以刃自貫其心而死、

といふ文があるので、これ等の例を參照して推論するならば、天帝が龍を降す場合は、必ずし

も帝徳の衰微の時とは限らないので、帝徳の盛なる時にも降すのであることが知られる。さすれば、かゝる盛時に降された龍は、天帝の代理者である現世の天子が果して責務を全うして居るかを監視する爲めと解され、而して帝徳が盛であるから勿論天帝の代理者であると思われる龍を御する御龍氏も、天帝の別名であると考へられる其の龍を畜養する參龍氏も居るので龍の心を満足させることが出来るが、時が経過するにつれ、世代が替るに従つて、淫徳の君主が現出し、諸侯が呻くやうなことになるが、一旦降下された龍は昇天して天帝の面前で、地上天子の行爲に對する善惡の報告をなすものと見られ、斯かる思想が古代支那人の腦裡に存在してゐたから、前掲封禪書や博物志の記載の如きものが今日に遺存してゐると想像される。そこで左傳には龍を降した者は上帝となつて居り、史記には天に作つて居るが、天と言ひ上帝と稱するも皆思想上の天帝を指して居るに變りはなく、封禪書や博物志には、「二龍去之」とか、「二龍降之」とかあつて天帝とも上帝とも明記されてないが、之れもまた天帝とか上帝とかが省略されてゐると見て差し支へはない。たゞ茲に注意すべきは、それは、天子が淫亂であり帝徳が衰微した時に降されたにしても、諸侯は服従し、帝徳が盛んな時に降されたにしても、龍なるものは必ず天若しくは上帝と、地上の皇帝との中間に介在して居るといふことである。

處で實際觀念から推論して見るも、理論上彼の蒼々たる天空の高處より、或は動物、或は植物、其他種々な生物などが降下して來るといふことは到底考へられないが、萬能の力を有つ

てゐる天帝ならば、宇宙を支配する全能の神であるから、意のまゝに萬物を降下せしむることが出来ると思惟する者があれば、現今に於てはそれは狂人の思惟であり空想であり夢想である。併し、それにも拘らず、天空から物體の降下を物語つてゐる文獻が諸國に遺存してゐるのは何故であらうか、それは實際に、萬物が降下することが無いといふ點に基礎を置いてそれ等の物語を解けば、その物語の内容は歴史的事實では無いが、さういふ思想があつたから、そのやうな物語が残存してゐるのであつて、其處に吾々は思想的事實の存在を否定する譯にゆかない。

例へば我國の古傳説にも、天空高天原に諸々の神がましましたが、遂に天照大神は皇孫瓊瓊杵尊を地上に天降らしめ、有名な豐葦原の千五百秋之瑞穗國は、是れ吾が子孫の王たる可き地なり、宜しく爾皇孫就きて治しむべし、行ませ、寶祚の隆えまさむこと天壤と窮り無かるべし、⁽¹⁾といふ神勅を下して皇孫に現世を御經營せしめられてゐるが、實際高天原なるものは、天空上に在り、其處に諸神が居住するなどいふことは有り得べきことでなく、從つて勿論それは思想的產物であり、一國の君主を偉大ならしむる爲めに、君主の御先祖を天神に結合せしめて構成された所謂皇室尊重の建國傳説であることは疑ふ餘地が無いが、斯かる事例は單に我國の古傳説にのみ見らるゝ現象でなく、他の民族の神話傳説にも表はれてゐる現象であつて、支那に於いては殷の始祖や周の建國者の傳説は正しく其の範疇に入れらるべきものである。⁽²⁾而して象龍氏や御龍氏の物語に現はれてゐる天降の龍は、現代の正確なる知

識から判斷して實際天空より降下するなどいふ事は縦しそれが古代であらうとも考へられない事であるから、歴史的事實とは見られないが、建國傳説などの場合と同様に、思想的事實と見るのは差し支へがない。それで文化程度の幼稚なる古代社會とか未開人の間では、現世に於ける天子とか酋長とかは種々な民族間の建國傳説などで知られてゐる如く、其の始祖は all seeing な天帝の子孫であるとして民衆からは何等疑念を抱かれなかつたものであり、支那に於いて現世の統治者を「天の子」即ち天子と稱してゐるのは天子親らも天の子であり、天の代理者であると考へ、一般人もまた斯く信じてゐたので天子とか天皇とかいふ名稱が唱へられたのである。さすれば其の天子とか天皇とかは、現世の政治をなすに天上の神靈に、天を支配する天帝の意に添ふ如く事を進めるのが當然で、時には天帝に祈禱を捧げて事を謀る態度に出なければならぬのである。然るに此の當然な慣習を實行しなかつたので、夏帝孔甲は天帝の神慮に叶はない皇帝の一人となつたのであると見られる。

一般に政治と宗教とが未だ分離してゐない程文化程度の低級な社會にあつては、政治的に現世の統治者たる天子が、宗教的に精神界の統治者として祭祀を司る shaman の役をも兼任してゐたのであるが、漸次進歩した文化層に到達すると、此の二者は分離して職務上獨立の立場を守ることになるが、さすれば天子は政治的に俗界を統治し、宗教的の役割をば之れを shaman に歸屬せしむるのが普通である。例へば古代日本の社會に於いても、最初は祭政一致で俗界精神界の支配統治が共に天皇に歸してゐたらうことは、言語の上で政治を manu-

rigoto と稱し、祭事をも maturigoto と言つて居るので推察されるが、これのみでなく他の多くの民族間でも政治的に俗界を支配する權威ある天子といふものゝ起源は宗教的な巫覡階級であつて、それから分離し發達したものであるといふ多くの例證を擧げることも出来る⁽¹⁾。そこで左傳や史記の豢龍氏や御龍氏の物語を見ると、豢龍氏は舜に服事したとなつてゐるし、御龍氏は夏帝孔甲に臣事したとなつてゐるので、此の物語が構成組織された頃は勿論政治と宗教とが派生してゐた時であり、天子と巫覡の職能は完全に分化してゐた時と見られる。併しまた一方に支那では天子親ら行ふ祭事に天を祭る郊祀といふ儀式があつて、封禪と對して天子の爲す重要なものであるが、其の慣習が後世まで持續されてゐるに參照すると、天子親らが天を崇敬し、天の神靈即ち天帝に仕へるといふ觀念が古代から存續してゐたことが解るし、それによつて、古代の日本で祭政が一致してゐるやうに、古代の支那でも天子と巫覡の職務とが一致してゐたらうと思はるゝ古代思想の片鱗を見ることが出来るがそれは茲では論じないとして、兎に角祭政が分離した頃の或る時期に作られたと思はる豢龍氏御龍氏の物語に、天帝が龍を降したといふことは、孔甲立、好方鬼神事淫亂とある文や、孔甲擾于有帝とある句や、夏后氏德衰、諸侯畔之とある文面などを見ると、天の子であり天の代理者である孔甲が、上帝を崇敬せずに別に鬼神を信仰して上帝を疏んじ、上帝の意に逆ひ、上帝の心を擾したのであるから、其の後に、天降龍二と、帝賜之乘龍河漢各二とかある天帝の降した龍は、孔甲の不徳を監視し、彼の淫亂を戒める爲めと見られ、従つて其の龍を The

Spirit of Heavenと考へても不都合はないと思はれる。

而して斯る場合天帝の代理者若しくは The Spirit of Heavenとして天降りするものは、必ずしも龍といふ形態をとるのではなく、時に或は暴雷となり大電として現はれ、或は日光と變じ虹蜺と代り、或は白氣となり巨跡として印され、また或は白電となり玄鳥の姿となる等態であつて、それ等の文例は既に、殷周の感生傳説の解釋の條に列擧して置いたが、此處では龍態を明らかにしようとしてゐるのであるから、天帝が龍神として現はれた他の二三の例を附記して置くことにすると、史記三皇本紀の庖犧の傳説を記した條に、

大皞庖犧氏風姓、代燧八氏、繼天而王、母曰華胥、履大人迹於雷澤、而生庖犧於成紀、

といふ句があるが、これは華胥といふ婦人が大人の巨迹を雷澤に履んで庖犧を生んだといふ庖犧誕生の傳説である。

これと同様な記載は、詩緯含神霧にも、

大跡出雷澤、華胥履之生宓犧、

とあるが、此等大人の迹とか大跡とかは、天帝即ち The Spirit of Heavenの現世に印した足跡と考へられるので、此の大跡を履んだ華胥が生んだ庖犧は天帝の精を承けた聖人と見られるのである。

然るに山海經、海内東經に、

雷澤中有雷神、龍神而人頭、鼓其腹云々、

とあり、淮南子、墜形訓に、

狗國在其東、雷澤有神、龍身人頭、鼓其腹而漚、

とある文を参照すると、庖犧傳説の大跡は、雷澤に降下した天帝の代理者龍神と同一のものであると想はれる。

更に神農氏の出生傳説を見ると、史記三皇本紀に、

炎帝神農氏、姜姓、母曰女登、有嬌氏之女爲少典妃、感神龍而生炎帝、

とあり、堯の誕生傳説を見ると、詩緯含神霧に、

慶都與赤龍合昏、生赤帝、伊祁堯也、

とあるが、此等上掲の文獻により判斷すると、何れも天の精靈が龍の形態となつて天降り、女登や慶都と合昏したといふ物語であり、其處に龍神と言はれ赤龍と稱されてゐるのは即ち The Spirit of Heaven と考へて差し支へがなう。

また史記に載せてある襄姁傳説の最初に、

昔自夏后氏之衰也、有二神龍、止於夏帝庭、而言曰、余襄之二君、

の句が記されてゐるが、此の場合二神龍が夏帝の庭に天降したといふ叙述は、夏帝孔甲の時に天帝が二龍を降したといふ先述の蒙龍氏御龍氏の物語と同一淵源を有つてゐるものと思はれ、その降下した神龍が襄姁誕生に深い關係を有してゐるのである。即ち前文の續きとして、史記に、

夏帝卜殺之與去之與止之、莫吉、卜請其禳而藏之、乃吉、於是布幣而策告之、龍亡而禳在、禳而去之、夏亡、傳此器殷、殷亡又傳此器周、比三代莫敢發之、至厲王之末發而觀之、禳流于庭、不可除、厲王使婦人裸而譟之、禳化爲玄黿、以入王後宮、後宮之童妾、旣亂而遭之、旣笄而孕、無夫而生子、懼而奔之、宣王之時、童女謠曰、繫弧箕服、實亡周國、於是宣王聞之、有夫婦賣是器者、宣王使執而戮之、逃於道、而見鄉者後宮童妾所弃妖子出於路者、聞其夜啼、哀而收之、夫婦遂亡奔於襄、襄人有罪、請入童妾所弃女子者於王、以贖罪、弃女子出於襄、是爲褒姒、

とあるが、此の文面から察すると、龍が亡びて、積中に禳が残り、残つたのであり、更に其の積を殷から周まで發いて見なかつたが、厲王の時に開發して觀た處、其の禳は化して玄黿となり、以て王の後宮に入り、後宮の童妾にして之れに遭遇した者が懷妊し、斯くて生れた者が幽王に寵愛された褒姒であるといふのだから、褒姒の生出は龍と深い關係があることが分る。

また漢高祖劉邦の生出傳説を見ると、これまた龍と關係があるが、それは史記高祖本紀八卷に、

高祖沛豐邑中陽里人、姓劉氏、字季、父曰太公、母曰劉媪、其先劉媪嘗息大澤之陂、夢與神遇、是時雷電晦冥、太公往視、則見蛟龍於其上、已而有身、遂產高祖、高祖爲人隆準而龍顏、

とある文を初めとして其の注文には、
索隱曰、按詩含神霧云、赤龍感女媧、劉季興、
とかまた

索隱曰、始皇蜂目長準、蓋鼻高起、文類說是、高祖感龍而生、故其顏貌似龍、長頸而高鼻、

とかあるが、これ等の例によつて見ると高祖もまた褒姒生出の傳説と同様に其の系統を龍に結び付けて説明されてゐるのである。

扱て此等前掲の生出傳説は何れも天の精靈が降下して婦人に感じ以て現世の統治者たる天子を生出したとか、若しくは偉大なる人物を誕生したとかいふ思想を表現してゐる傳説であるが、斯くの如き思想は當然また天子親らが天帝を崇敬するとか、或は天子の臣下であつて宗教上の職務を分擔する巫覡等が、良く天帝に奉仕することによつて天帝を喜ばしめ、其の結果天帝即ち「The Spirit of Heaven」が、龍神なり、玄鳥なりの形態をとる代理者を降下せしめて其の國家其の家族の基礎を築くが如き人物を誕生せしめるといふ考へ、¹⁵或は反對に天子若しくは巫覡が天帝に従順でなく天帝の心を擾し、天帝の感情を害するならば、天帝又は天の精靈は、龍神なり、暴雷なりの形態を備へてゐる代理者を降して以て地上の天子を誡飭するといふ思想など、共通なものであることが分る。

斯くの如く推論して來ると、左傳に天帝が夏帝孔甲の時龍二を降したとある句を承けて、孔甲不能食、而未獲豢龍氏、有陶唐氏既衰其後、有劉累學擾龍于豢龍氏、以事孔甲、能飲食之、夏后嘉之、賜氏曰御龍、

とある、また史記の文も、之れと同様であるが、之等の文意は自然に了解されると思ふ。即ち先きに引用して置いた文によつて一言解説をして見ると、左傳には夏帝孔甲は天帝の心を

擾亂したとあり、史記には鬼神を好み頗る淫亂だつたので帝徳は愈々衰微し、諸侯は皆之れに畔いだと記されてゐるのであるから、眞に天帝の代理者として地上を統治するに適應してゐる君主で無かつたことが證され、孔甲不能食とあるのを見ると、夏帝孔甲は天帝が降して以て事の善惡正邪を告知せしめんとした龍を自由に操縦し、能く畜養するだけの能力に缺けてゐたことが知られる。

併し孔甲の徳が全然衰微し終つたので無いと思はれるのは最初は天子親らも或は彼の臣下にも天帝の意を探知する程の者が居らなかつたが、後には堯の子孫である劉累といふ名巫覡が現はれて孔甲に服事し、精神的職分に於いて孔甲を補佐してゐると物語られてゐるのでも解る。彼は舜に仕へた參龍氏について參龍の術を學び其の職を以て孔甲に事へたのであるが、此の劉累が良く天帝の意を聞知し天帝崇敬の誠を盡したため天下は事なきを得たので、孔甲喜びて劉累に姓を賜はり御龍氏と稱せしめたのである。惟ふに御龍とは、牛馬などを能く御するとか、部民を統御する才能を有つかいふ場合に使用すると同意味の使用法で、龍を良く御することが出来るといふ意味であり、再言すれば天の精靈の姿を見たり、其の聲を聞いたりすることが出来る名巫覡であつたから御龍氏と命名されたのであらう。龍を御するといふ句は莊子の逍遙遊の中にも見えてゐる。即ち、乘雲氣、御飛龍といふ句がそれであるが、これも神人が飛龍を自由自在に操縦する有様を思想的に稱したので、左傳史記にある御龍と同意義であらう。其外庖犧氏に就いても、史記三皇本紀に、有龍瑞

以龍紀官號曰龍師とある條の龍師の如きも恐らく龍を御する巫覡を指してゐるであらうし、また同じく三皇本紀に、人皇九頭乘雲車、駕六羽出谷口、兄弟九人分長九州、各立城邑、凡一百五十世、合四萬五千六百年、自人皇已後有五龍氏とある條の人皇氏や、それより出でたる兄弟五人の龍氏なども雲車に乗つたり六羽に駕したりして空中を上下したりし得るといふのであるから、矢張り左傳史記に見えてゐるあの參龍氏御龍氏と同一なものと見る事が出来るやう。而してそれは古代支那の巫覡階級の描寫記事と推察されるのである。

扱て夏帝孔甲の傳説中に見える御龍氏を上述の如く巫覡巫祝の階級と解して誤がなければ、夏朝では孔甲の時より桀王に至るまでに漸次衰運に傾き、諸侯は次第に畔くやうになつて來たが、孔甲の時に未だ滅亡しなかつたと記されてゐるのは、猶ほ臣下に劉累の如き名巫覡があつてよく龍を御し天帝の聲に耳を傾けるに努力したが爲めであつたといふ自分の推論は正しいと考へられるが、更にまた參龍氏も御龍氏と同様に巫覡階級の者と解して誤なければ、參龍とか畜龍の意味もまた何であるか、察知せられることになる。

秋龍見于絳郊、魏獻子問於蔡墨曰、吾聞之、蟲莫知於龍、以其不生得也、謂之知信乎、對曰、人實不知、非龍實知、

といふ句は、先きに既に掲げて置いた左傳の一節であるが、これは秋に至り晉の國都絳の郊外に龍が現はれたといふので民衆間に風説騷然たるものがあつたので、此の時魏獻子は晉の大史蔡墨に、自分は龍ほど智惠のあるものは外に無いと聞いてゐる、その故は生れ乍ら人

間に捕獲されるやうな事が無い爲めだといふことであるが、果して其の解釋は信用すべきものであらうかどうかと問ふた處、蔡墨は、恐れ乍ら左様な解釋は誤つた解釋であつて、それは龍が智慧があるのでは無く、寧ろ人間が智慧が足りないので龍を捕獲することが出来ないものでありますと對へて居る文である。

右の文面によつて之れを觀察すると、魏獻子の頃既に龍なるものゝ形貌を實際に見聞した者が無かつたことを證明して居るので、龍は生れ乍ら決して捕獲されないものであると説かれてゐる其の文でこれが解る。而して更に大史蔡墨の語る處を引用すると、

古者畜龍故有蔡龍氏、有御龍氏、

と言つて居り、獻子また其の言葉を受けて、

是二氏者吾實聞之、而不知其故、是何謂也、

と問ふてゐるのを見ると、蔡龍氏や御龍氏の意味が當時既に知識階級の者にも了解されて居られなかつたことが知られる。

此の魏獻子の質問に對して、蔡墨は其の意味を説明し、

昔有驪叔安有裔子、曰董父、實甚好龍、能求其者欲、以飲食之、龍多歸之、乃擾畜龍、以服事帝舜、舜賜之姓、曰董氏、曰蔡龍、封諸馮川、馮夷氏其後也、故帝舜氏世々有畜龍、

と答へてゐるが、此の説明でも矢張り蔡龍の意味が明瞭にされてゐない。蔡墨は太史であるから、皇帝の臣下で巫祝の職をも兼ねられる程のもので、當時としては博學多識であつた

筭であるが、而も象龍の意味を解釋することが出來ず、獻子の質問に對して一時を糊塗して居るかに見える。

然るに余輩が論究して來たやうに、御龍氏を龍を御する巫覡、天の精靈を御する巫祝、天意を傳達し、靈聲を聞知することが出来る shaman の意味に解し、象龍氏もまた之れと同様なものであるとするならば、左傳史記の御龍氏の傳説は矛盾なく解釋されるところと思ふ。即ち董父が「實甚好龍」とは天の精靈に事へるを好むので、能求其耆欲以飲食之とは、天帝の意のある處は、龍の形態を持つてゐる精靈によつて指示されてゐるのであるから、其の精靈の耆欲を求めて之れに飲食せしむることを指してゐるのである。斯くて龍の多くは彼に歸し、彼れまた龍を畜つたので、董父は名巫覡と稱してもよいのであり、此の巫祝の職を以て舜に事へたので、舜は彼に象龍氏と姓を賜はつたのである。同様に劉累また龍を畜養することが出來た名巫覡であつたので、夏帝孔甲は彼に御龍氏と賜はつたのである。

說いて此處に至れば、最早や御龍氏及び象龍氏が巫覡を意味してゐると觀て誤は無からうと思ふが、此の巫覡とは即ち亞細亞北方諸民族に見らるゝ shaman であつて、此の shaman は天上にある神の意を知ることが出來ると同時に、地上に於ける庶民間の事件を天上に居る神靈に告知するを以て彼等の職能とするのであるから、所謂 spirit と接觸することが出来るのである。而して董父が畜養したといふ龍も、劉累が御したといふ龍も shaman が接觸し得る spirit の一種と見て差し支へがなからう。

そこで此の左傳、史記の物語では、袁龍氏が帝舜に服事したとか、御龍氏が夏帝孔甲に臣事したとか、また御龍氏劉累は陶唐氏堯の子孫であつたとかいふことになつてゐるが、此の傳説此の物語は決して時代的に考察して堯舜禹頃などいふ古い頃のものでも無く、實在的なものとして信用されるやうな史實でもなく、惟ふにそれは後世の人によつて構成された説話物語で、其の中には、民間では天子は實際「天の子」であり、「天の代理者」であると考へられてゐたから、天子親らも現世を統治するには事毎に天の聲を聞いてから後に命令なり詔令なりを發するといふのが彼等の責務であつたらう、それであるから此等御龍氏袁龍氏の物語中には治者階級が被治者階級に對する統治政策の理想の一部が織り込まれてゐると考へても無理はないと想はれる。其の天の聲を聞く爲めには祭事をなし祈願をこめるといふ行爲をなすのであらうが、それによつて一視同仁の政治を施すとか、民心を得んとするとかに意を用ゐるならば、而してまた既に政治と宗教とが分離されてゐる時代であつたとすれば、天子の臣下に當然祭事を司り、天帝の聲を聞き得る巫覡、spiritと交驩し得るshaman階級の存在が承認されなければならなく、此の者が支配者に附隨して絶えず精神界方面に活躍してゐたと想像されるから、それ故に此の物語には上代支那人の天の精靈を崇拜するといふ觀念と、また天人合一の思想を構成するに缺く可からざる巫覡階級の存在と其の生活とが反映して居るものと思はれる。従つてそれは宗教生活に没頭してゐたshaman階級の人々であり、其の上にまた天帝と地上の天子天帝の降す精靈即ち龍と地上の巫覡即ち袁龍氏御

龍氏などを對立せしめて、天界人間界とを結び付けてゐるので、天體の知識をも有つてゐた者、更に帝王傳説を齎して帝王の統治理想を織り込んだ教訓的要素をも示してゐるので、儒教思想を了解してゐた知識階級の者等によつて組織構成された物語であり、説話であると推察するのが最も妥當ではなからうかと考へる。天崇拜の思想や、巫覡の生活描寫などが帝王生出傳説、天子の統治傳説などに儒教學者に依つて結び付けられるのは最も自然な發展傾向であり、結合狀態であつて、天子といふ觀念が、古傳説に多く見らるゝ如く、天の精靈が、地上の婦人の胎内に宿つて以て懷妊したのであるから、天子と稱せられるのであることを考慮に入れると、その結合狀態が自然であることが了解されやう。

上述の如く左傳や史記に見える、饕龍氏、御龍氏の物語で、其の饕龍氏、御龍氏を巫覡の一人と解し、従つて龍を天空に居る精靈、天帝の使者となり、天帝の代理者となる其の精靈の一種と説いて來たが、此の解釋を更に一段と良く證明し、一段と力強く説明してくれる文獻がここにある。

それは左傳や史記に比較しては後世のものではあるが、抱朴子に

案使者甘宗所奏西域事云、外國方士能神呪者、臨淵泉禹步吹氣、龍即浮出、其初出乃長十數丈、于是方士更一吹之、一吹則龍輒一縮、至長數寸、方士乃掇取著壺中、壺中或有四五龍、以少水養之、以疏物塞壺口、國常患旱炎、于是方士聞餘國有少雨、屢旱處、便賣龍往賣之、一龍直數十斤、舉國會斂以顧之、直畢、乃發壺中出一龍、著潭中、因後禹步吹之、一吹一長、輒長數十丈、須

奥而雲雨四集矣、

とあるのがそれである。⁽¹⁸⁾

扱て前に既に象龍氏御龍氏といふのは龍を祭ひ龍を御する術を熟知してゐた處から其の名を得たのであり、其の龍を祭ひ其の龍を御する者は、天界と地上の人間界とを結合せしむる役割を演ずる巫覡であらうと説いて置いたが、此處の枹朴子の記載を見ると、龍を左右するものは神呪をよくするもの即ち方士であつて、方士とは他の言葉を借りて言へば巫覡であり shaman であり magician であり、medicine man であり、witch doctor であり、rain maker である。先きの象龍氏御龍氏の物語では、彼等は龍の耆欲を知り龍を畜養する能力あることを叙述してゐたが、呪術を爲して黒雲を集合し、雨を降らせる力量を有つてゐるといふ記述は無かつた。即ち彼等象龍氏御龍氏は其時には rain maker としての才能を表現して居らなかつた。併し天の精靈を左右し、雲車に乗り六羽に駕する巫覡ならば、當然雨をも降らせる力を持つてゐる rain maker であつてもよい筈である。そこで此處に引用した枹朴子の記載を見ると、神呪をなす者即ち方士が淵泉に臨み禹歩し乍ら吹氣すれば輒ちにして龍態が其處に浮動現出するといふことになつて居り、其の初出の龍は身長十數丈大のものであるが、方士が更に吹氣また吹氣すれば其の龍態を僅か數寸のものに縮小せしむることが出來、それを掇取して壺中に容れ他の三四の龍と共に水にて養ひ置くのであり、夏時旱魃に困苦する地方あるを聞けば、方士は是等壺中の龍を齎して其の地の人々に賣り捌き、一龍の價數十

斤を納むるに及んで方士は龍を壺中より取り出し之れを附近の潭中に置き、潭に臨んで禹歩吹氣すれば、輒ちにして長さ數十丈大の龍が浮び出で、須臾にして雲雨四集して降雨するとなつてゐる。想ふに此の枹朴子の記載は、天界と地上人間界の中間に介在して、天の精靈と民衆の交驩を司る方士若しくは巫覡が、農業民族間に附随する雨請といふ儀式に關與してゐることを描寫した物語であることが解る。そこで前に左傳史記に見える豢龍や畜龍の意味を、實際的に龍といふ動物を畜養してゐたものでなく、それは天の精靈の聲を聞き得る巫覡である處から其の名を得たのであると解して置いたが、此處の枹朴子に見える壺中に水を以て龍を養ひ得るといふ記載も、其の龍が方士の神呪の結果數寸のものが數十丈大にもなるといふのであつて見れば、當然事實とは考察することが出來ないのである。Graham

は靈を左右する能力を有つて居り、龍は靈と同意味であり靈の具體化が龍であるとすれば、巫覡は其の靈、其の龍を自由に操ることが出來るのであるから、巫覡の力を益々神祕なものとし以て其の優越觀を満足せしめんとする彼等の徒輩は、何人も未だ嘗て見聞したことも無いと稱する龍を壺中に畜養し得ることゝして一般民衆を愚弄し、且つまた早魃に困苦する地方にその龍を齎し澍雨を降らせることも出來るとなして金錢を取得し、以て彼等の生活費を稼いでゐたと考へられる。處で枹朴子には神呪を能くする方士が淵泉に臨んで禹歩吹氣すれば數十丈大の龍を浮動湧出せしめ、更に吹氣また吹氣すれば數寸のものに縮小せしめ得るといふ話を、案使者甘宗所奏西域事云、外國方士能神呪者……としてあるが、

淵泉に臨み禹歩吹氣して數十丈大の龍を現出せしむる術は、抱朴子を著はした葛洪時代より遙か以前の漢代に於いて既に行はれてゐたやうである。漢書に、文帝景帝の時代は、内政に専念し、民を養ふに勤めた結果、天下は殷富となり、財力は餘裕を生じ、士馬また彊盛に趣いたので、其の後を襲ふて帝位に即いた武帝は、其の餘力を以て匈奴を征して彼等を遙か北方に逐ひ、遂に漠南に王庭なしと言はるゝに至り爲めに殊方の異物は四面より來り、四夷の君長また漢に朝貢することゝなつたといふことを録し、其の續きに、

設酒池肉林、以饗四夷之客、作巴俞都盧海中磬極漫延魚龍角抵之戲、以觀視之、

といふ記載があるが、此處の漫延魚龍の戲などは、抱朴子の中にあつた方士の禹歩吹氣の結果淵泉附近に浮動湧出せしめられた龍態などゝ同様なものであらう。

此の漫延魚龍に就いて師古の注には、

漫延者即張衡西京賦所云巨獸百尋是爲漫延者也、魚龍者爲舍利之獸、先戲於庭、極畢乃入殿前、激水、化成比目魚、跳躍激水作霧障目、畢化成黃龍八丈、出水敖戲於庭、炫耀日光、西京賦云、海鱗變而成龍而爲此色也、

とある。

更に漫延魚龍の記述はまた後漢書にも見えて居り、安帝紀五卷に

延平元年十二年甲子清河王薨使司空持節弔祭車騎將軍隲陳護喪事乙酉罷魚龍曼延百戲

と錄されてゐるのがそれである。⁽²¹⁾ 唐の章懷太子の註には

漢官典職曰作九賓樂、舍利從西方來戲於庭、入前殿、激水化成比目魚、嗽水作霧、化成黃龍、長八丈、出水、遊戲於庭、炫耀日光、漫延者獸名也、張衡西京賦所云巨獸百尋是爲蔓延、とある。⁽²²⁾

更にまた後漢書禮儀志^{第五}には、

百官賀正月、二千石以上殿稱萬歲、舉觴御坐前、司空奉羹、大司農奉飯、奏食舉之樂、百官受賜宴饗大作樂、

とあり、正月に於ける宮廷拜賀の式の様子が記載されてゐるが、梁の劉昭は此の條に註して、作九賓徹樂、舍利從西方來戲於庭、極乃畢、入殿前、激水、化爲比目魚、跳躍、嗽水作霧、彰日、畢化成黃龍、長八丈、出水、遊戲於庭、炫耀日光、以兩大絲繩繫兩柱中、頭間相去數丈、兩倡女對舞行於繩上、對面、道逢、切肩不傾、又蹋局出身、藏形於斗中、鐘磬並作樂、畢作魚龍曼延、小黃門吹三通、謁者引公卿群臣、以次拜、徹行出罷、

と言つて居る。⁽²³⁾

斯くの如く漢書及び後漢書の文例により、更にまた其の補註の文を參照すると、漢代既に漢の朝廷では、朝貢した四夷の君長等を接待する時、其の接待と同時に漢の文化を彼等に示せんとして、驚異的な戲術を觀覽せしめてゐたことが分る。而してそれ等の戲術は何れも神變不可思議なものであるが、漫延に就いては師古の註に「巨獸百尋是爲漫延者也」とあり、

魚龍に就いては最初それが舍利之獸であつたが、次ぎに殿前の水中に入り、比目魚となり激水跳躍、嗽水作霧して長さ八丈許の黃龍となるといふのであるから、若しこの技が事實であつたとすれば、觀客をして目を峙だたしめたことがあつたらう。併しこれ等神變不可思議な戲術も、一般に現在慣行されてゐる多くの遊戲は、例へば五月五日に爲さるゝ渡競とか、正月に小兒によつて揚げられる紙鳶なども其の例に漏れないのであるが、その起源を究むる時、何れも宗教的な出發點を有つてゐるものであるが、此の魚龍漫延などいふ戲術も最初は雨請の儀式などで、精靈と交驩し得る巫覡が天帝に禪祀した後、に嗽水作霧などいふ行爲をなし、旋てそれが黑雲と變じ、龍態現はれ、澍雨を降らせるといふ所謂呪術的な ceremony をなしてゐたもので、其の技が餘り巧妙であつた處から、神を對象として行はれた magic art は遂に戲術化して多くの人々の觀覽に供せらるゝに至つたのであらうと思はれる。

それで漢書や後漢書に見える漫延魚龍とか作霧成龍の記載と、桤朴子に見える方士が禹歩吹氣すれば龍即浮出となる叙述とは、歸する處龍態を或る方法によつて現出せしむるといふ點で同一なものと考へられる。而して桤朴子では數十丈大に浮出せしめられた龍は、旋て雲雨を四集し澍雨を齎すといふことになつて居り、其の龍を湧出せしむる役割を演ずる者は禹歩吹氣する方士即ち shaman であり、從つてそれは早魃時に於ける雨乞の儀式的記載であることが知られるが、漢書、後漢書の作霧成龍の條には雲雨四集するといふ記載も請雨らしき記述も無く、またそれに關與する巫覡も現はれて來ないので専ら音樂に伴はれる

戲術的な成龍の記録としか考へられない。だから同じく龍を浮出せしむる術を爲したとしても、漢書後漢書などのそれは四夷の君長に觀覽せしむるといふ技術的若しくは遊戲的方面に重點を置いてゐる叙述であるが、桄朴子のそれは雨乞儀式といふ民間的慣習の描寫に重點を置いてある記載であると思はれる。それ故漢代に於いても既に龍の形態を論じた條に述べて置いた如く、龍體作成と雨乞儀式とは密接な關係を持つてゐたのであり、且つまた同じく漢代や後漢時の風俗慣習を書き遺してある漢書後漢書に漫延魚龍などいふ戲術的に取り扱はれる作霧成龍の記載があるを比較して見れば、漢代既に雨乞の儀式に、桄朴子に見るやうな、方士が淵泉に龍態を出現するといふ行爲を賞演してゐたらうとも推論されるのである。

そこで斯る戲術は外國傳來のものか、支那内地に於いて發達したものか、どうかに就いても一應考慮を拂つて見なければならぬ。先づ先きに引用した漢書の文に、作巴俞都盧の句があるが、都盧は竿に迅速に攀ぢ上つたり下つたりすること、庭内にて遊戲する陸上競技の一種であり、巴俞人は所謂賣人で勁銳善舞する才能があり、漢の高祖の時高祖に従つて三秦を平定するに功があつたと稱せられ、それが爲めに高祖は樂人に巴俞の舞を習はしめたと言はれてゐる。それ故に武帝頃となり西域地方の夷狄の君長が多く朝貢するに當つて、漢文化を以て彼等を驚かせんとした時かゝる遊戲を觀覽せしめたといふことも當然であつたらう。

また漢書に「作漫延魚龍」とか、後漢書に「罷魚龍曼延」とかある其の漫延魚龍も、漫延に就いては同じく漢代のものである張平子の西京賦には「巨獸百尋是爲曼延」とあり、唐の李善の註には「大獸長八十丈、所謂蛇龍曼延也」などあり、更に漫延は漫衍などとも書き、水に關係してゐる言葉であるらしく霧中に漫衍と長蛇の如き龍形を現はす術を演ずる遊戲を指してゐるのであらうから、此の漫延を現出せしむる戲術は董仲舒の春秋繁露の求雨の條に長大の土龍を作成する記載があるが、その思想觀念が聯想されて外國傳來の戲術などとは考へられなう。

次に魚龍に就いては、師古の漢書の註には説明の初句に「魚龍者爲舍利之獸、先戲於庭」とあり、章懷太子の後漢書の註には「舍利之獸、從西方來、戲於庭」とあり、舍利といふ意が、佛舍利即ち佛骨を連想し、また北番僧帥舍利部の大人を聯想するので、舍利獸が比目魚となり、後にまた黃龍と化するなどいふ戲術の記録を讀むと、其の戲術は印度若しくは西域地方から傳來でもして來たものゝやうに考へられるが、一方後漢書禮儀志劉昭の註に「舍利獸が比目魚となり更に黃龍と化したことを記してゐるが、其の後段には其の黃龍が再び水を出で、庭に遊戲する有様を述べて

以兩大絲繩繫兩柱中、頭間相去數丈、兩倡女對舞行於繩上、對面、道逢切肩不傾、又蹋局出身、藏形於斗中、鐘磬並作樂畢、作魚龍曼延、

と言ふて居るのを參照すると、何か異國產の動物の形貌を模したものを身に付けて、女技術

者が戲術を爲して衆人の觀覽に供したのであらうと思はれる。

其の外にも張平子の西京賦に、

海鱗變而成龍、狀蜿蜿以蜺蜺、

の句などが見えて居るが、李善註には

海鱗大魚也、初作大魚、從東方來、當觀前而變作龍、蜿蜿蜺蜺龍形貌也、

とあつて、これは漢書後漢書の魚龍の條の註文に比適すべきものであることが解るし、また同じく西京賦に

吞刀吐火、雲霧杳冥、

の句があり、李善註に、

善曰西京雜記曰、東海黃公立興雲霧、漢官典職曰、正旦作樂、漱水成霧、楚辭曰、杳冥兮晝晦、とあるのを參考とし、更に、

晝地成川、流渭通涇、

とある註文には、

善曰西京雜記曰、東海黃公坐成山河、又曰淮南王好方士、方士晝地成河

とあるが、此等の文例によつて見ると、漢代既に樛朴子に見えるやうなこと、即ち雨乞儀式として作霧成龍をなしたことなどは、戲術として盛に行はれてゐたらうと推察される。

それから海中碣極は、漢書の註では、碣極樂名也、とあるが、樂と戲とは互に並行して行はれ

たものであることは後漢書禮儀志の漫延魚龍の條の註を見れば分るのであるから、縦しそれが樂名であるとしても、それに相當する遊戲が行はれたのであらうそして碣は盪溢の意味で、舂舟之魚碣而失水などいふ場合に使用されるを見ると、後漢書の註文に舍利獸が庭前に戯れてから、次の行動に變る處を、極乃畢入殿前激水、化爲比目魚、跳躍嗽水作霧郭日」と説明してゐるのが海中碣極を指してゐるのであらうし、西京賦に、

蟾蜍與龜水人弄蛇、

とあり李善註には、

作千歲蟾蜍及千歲龜、行舞於前也、水人俚兒能禁固、弄蛇也、

と見えるものがあるが、こゝに水人とか俚兒などいふ語が使用されて居り禁呪などの文字が出て來るのを見ると、斯る戲術には南方支那の黎人、即ち水人として水中動作に熟練してゐる倡優などが加はつてゐたであらうことが想像され、従つて漢書に見える「海中碣極」などいふ遊戲がこれに比較さるゝものであらう。

それから角抵といふ戲術は、角觝であつて、張平子の西京賦に、

臨廻望之廣場、程角觝之妙戲、

とあり註には、

角觝兩々相當角力、技藝射御故名角觝也、

とある其の角觝であるが、角觝は隋書に、

都邑百姓每至正月十五日、作角抵戲、戴獸面、男爲女服、柳或請禁斷之、

とあるので、其の技術の模様が如何なるものであつたかは、⁽²⁾ほゞ推察される。さすれば後漢書の禮儀志の劉昭註に、以兩大絲繩繫兩柱中、頭間相去數丈、兩倡女對舞、行於繩上對面、道逢切肩不傾、又蹋局出身、藏形於斗中」とある如きも、其の頃の角抵技と見ることが出來やう。

此の角觝の戲に參照して見ると、巴俞都盧をなす倡優は舍利獸などといふ動物の姿態をなし、海中碣極をなす藝人は、西京賦の注文に、海鱗大魚也、初作大魚、從東方來、當觀前而變作龍」とあるので、想像される如く、魚類の形態を擬し、漫延魚龍などいふ遊戲をなす者も、西京賦の註文に、「作千歲蟾蜍及千歲龜、行舞於前也」とあるを參照すれば、夫れ夫れ相當な動物形態を裝ふて行動をなしたと思はれる。

張騫の遠征以後、明珠文甲、通犀翠羽の珍は後宮に盈ち、蒲梢龍文魚目汗血等の駿馬は黃門に溢れ、鉅象師子猛犬大雀等は外圍に群るといふ有様になつたのであるから、⁽²⁾それ等珍奇の動物の姿態を裝ひ、其の形貌を模造した面を頭に戴いて種々妙技を演じて衆人の觀覽に供することは、觀衆としては誠に興味津津たるものがあつたらう。併し假令技術者が異國產の動物形態を裝ふことがあつたとしても、魚龍漫延、海中碣極、巴俞都盧などいふ戲術そのものは、先きに説明を加へて置いた如く、水人とか俚兒とかいふ文字が用ひられ、巴俞とか都盧とかいふ語が示されてゐる點で、南方支那の色彩が濃厚に認められるが、決して西域文化の影響と見ることは出來ない。さすれば、枹朴子に記載された畜龍のこと、再步吹氣して其の

畜龍せる數寸のものを數十丈大のものとなし得るといふことなども西域地方の方士がなすものであるかの如く書かれてゐるが西京賦に、

東海黃公赤刀粵祝

とあり註に、

東海有龍赤刀、禹步以越人祝法厭虎者、號黃公、又於觀前爲之、

とある句を參照すると、西域地方のこととする必要はないのであつて、これは支那及び其の南方地方に行はれてゐた慣習であつたものであるが、樵朴子の作者頃の社會狀態からすれば、漢代に傳來した佛教も漸く隆盛に赴き固有の佛教思想にも影響を與へ、道教もまたそれが爲めに宗教として將に固まらんとしつゝあつたのであり、加ふるに漢代以來西方の物質文明も輸入されつゝあつたから、人々も外來文化に關心し憧憬するに至つたので、宗教者として民衆から彼等の生活費を稼がんとする道教派の者等も、西域地方の方士が行つてゐる禁呪方法だと稱して人衆を怡き金錢を收得したことがあつたらうと思はれる。それ故に樵朴子に龍を浮出せしむる方法を西域の風習でもあるかの如く書いてあるのも、龍を現出せしむることは事實上漢代既に支那人が行つてゐた技術であり、更に支那人は漢代と言はずもつと古くから龍を雲雨と結び付け、雨乞に關與せしめてゐたのであり、樵朴子の其の話も、全體の構想は支那式のものと考えられるから、方士が禹步吹氣して龍を浮出せしめるといふのも支那思想と考へて差し支へは無からう。

次に抱朴子には其の龍を壺中に少水を以て養つて居るといふことになつて居り、一方また壺中にある數寸の龍が方士の禹步吹氣の結果數十丈のものとなるとあるが、少水を以て畜養し得らるゝものとすれば龍が小動物であるかの如く思はれ數寸のものが輒ちにして數十丈のものとするなどの記事から判斷すると眞實の龍として地上に産するものとは考へられなく、既に御龍氏、參龍氏の條で説明したやうに此處の龍も spirit をやゝ具體的に表現したものに過ぎないと思はれる。従つて此處には龍に就いて具體的の考へと、抽象的な考へが混在してゐるやうに察せられる。

そこで方士が數寸の龍を數十丈のものとなし、數十丈のものを數寸のものとするものが出來るとある如きは、漢書後漢書に見える漫延魚龍の戲術をなす時に、倡優が作霧成龍の行爲をなしたと同様な幻術的な動作をなしたと見られるが、數寸の龍を數十丈に、數十丈のものを數寸になすことを得るといふことは古代支那人間には思想的に既に存在してゐたのであつて、管子の「水地篇」に

伏聞能存而能亡者、著龜與龍是也。龜被于水、發之于火、是爲萬物先、爲禍福正。龍于水被五色、故神、欲小則化如蠶、蠋、欲大則藏于天下、欲上則凌于雲氣、欲下則入于深泉、變化無日、上下無時、謂之神。

とあるなどは其の證據で、これに依つて觀れば古代支那人の腦中には、龍なるものは變化極まりなきものであるといふ觀念が宿つてゐたことが分る。而して抱朴子の抽象的部分

は此の菅子の文に見える龍を神とし精靈として居る思想と共通なもので、參龍氏や御龍氏が御したり畜養したりした龍の觀念とも同一なものである。

然らば枹朴子に見える少水を以て龍を壺中に飼育するといふ具體的な思想は如何に之れを説明すべきものか、全體を通じて枹朴子の記載は、方士巫覡が *rain maker* として *rain making* を爲す有様を叙述したもので、再歩吹氣の如きも、壺中に飼養してゐる龍を以て黒雲を四集せしむる如きも、一種の *rain charm* と見られるのである。それ故左傳史記の參龍氏御龍氏の文は、天の精靈を左右する巫覡の職に重きを置いて構成された物語と見られるが、枹朴子の記事は靈の活動の一つを叙述したものであり、其の靈は雨を降下する能力を發揮し得るといふ點に重きを置き、其の龍を左右する巫覡もまた雨乞といふ具體的な *magical art* を行ふ描寫となつてゐる。而して方士のなす *magical art* の何物であるか、解れば、少水を以て龍を養ふといふ觀念も了解される事になると思ふから以下少しく説明を加へて置くと、龍を浮出せしむるのに方士がなす *magical art* の一方法として泉淵に臨んで步履し乍ら吹氣するといふ儀式をなしてゐる吹氣は一種の嘘吸であるが、魚龍漫延の戲をなした時に霧を作つて龍を生成せしめたと同様に口より霧を吹く動作をなしたと思はれるから、單なる嘘吸と解することは出来なからう。それは日本神話の須佐之男命と天照大神とが宇氣比をなした條に、佐賀美邇邇美て吹き棄つる氣、吹の狹霧になりませる神の御名は云々とある古事記の文を參照すると、枹朴子のも矢張り方士が雨を降らせやうとして泉淵の邊りで先

づ口中に水を含み狭霧を吹き出して、以て壺中から取り出した數寸許の龍に精氣を與へて數十丈大の龍を湧出せしめんとした magic art と認められる。ちすればこれは一般に雨請の儀式によく見られる水滴を利用して雲雨を得んとする sympathetic magic の一種と考へられる。

水を散布したり、霧を吹き出したりして雨を得んとする慣習は普遍的なものであるから Frazer 氏の Golden Bough よりつて二三の例を示すと、中部 Celebes の例としては、

In Central Celebes when there has been no rain for a long time and the rice-stalks begin to shrivel up, many of the villagers, especially the young folk, go to a neighbouring brook and splash each other with water, shouting noisily, or squirt water on one another through bamboo tubes. Sometimes they imitate the plump of rain by smacking the surface of the water with their hands, or by placing an inverted gourd on it and drumming on the gourd with their fingers.

とあり Sumatra の例として、

The Karo-Bataks of Sumatra have a rain making ceremony which lasts a week. The men go about with bamboo squirts and the women with bows of water, and they drench each other or throw the water into the air and cry, "The rain has come," when it drips down on them.

とあり南アフリカの Bantu 族の間では大旱魃の原因を婦人の流産隠匿に歸して居るが、斯る場合請雨の儀式に注水とか散水とかの行爲が伴つてゐるから左に擧げると、

A small clearing is made in a thick and thorny wood, and here a pot is buried in the ground so that its mouth is flush with the surface. From the pot four channels run in the form of a cross to the four cardinal points of the horizon. Then a black ox or a black ram, without a speck of white on it, is killed and the pot is stuffed with the half-digested grass found in the animal's stomach. Next, little girls, still in the age of innocence, are sent to draw water, which they pour into the pot till it overflows into the four channels. After that the women assemble, strip off their clothes, and covering their nakedness only with a scanty petticoat of grass they dance, leap, and sing, "Rain, fall!" Then they go and dig up the remains of the prematurely born infants and of twins buried in dry ground on a hee. The women pour water on the graves of the infants and of twins in order to "extinguish" (tinnula) them, as the natives phrase it. At the fall of evening they bury all the remains they have discovered, poking them away in the mud near a stream. Then the rain will be free to fall, ⁽²⁾ ⁽³⁾ ⁽⁴⁾ ⁽⁵⁾ ⁽⁶⁾ ⁽⁷⁾ ⁽⁸⁾ ⁽⁹⁾ ⁽¹⁰⁾ ⁽¹¹⁾ ⁽¹²⁾ ⁽¹³⁾ ⁽¹⁴⁾ ⁽¹⁵⁾ ⁽¹⁶⁾ ⁽¹⁷⁾ ⁽¹⁸⁾ ⁽¹⁹⁾ ⁽²⁰⁾ ⁽²¹⁾ ⁽²²⁾ ⁽²³⁾ ⁽²⁴⁾ ⁽²⁵⁾ ⁽²⁶⁾ ⁽²⁷⁾ ⁽²⁸⁾ ⁽²⁹⁾ ⁽³⁰⁾ ⁽³¹⁾ ⁽³²⁾ ⁽³³⁾ ⁽³⁴⁾ ⁽³⁵⁾ ⁽³⁶⁾ ⁽³⁷⁾ ⁽³⁸⁾ ⁽³⁹⁾ ⁽⁴⁰⁾ ⁽⁴¹⁾ ⁽⁴²⁾ ⁽⁴³⁾ ⁽⁴⁴⁾ ⁽⁴⁵⁾ ⁽⁴⁶⁾ ⁽⁴⁷⁾ ⁽⁴⁸⁾ ⁽⁴⁹⁾ ⁽⁵⁰⁾ ⁽⁵¹⁾ ⁽⁵²⁾ ⁽⁵³⁾ ⁽⁵⁴⁾ ⁽⁵⁵⁾ ⁽⁵⁶⁾ ⁽⁵⁷⁾ ⁽⁵⁸⁾ ⁽⁵⁹⁾ ⁽⁶⁰⁾ ⁽⁶¹⁾ ⁽⁶²⁾ ⁽⁶³⁾ ⁽⁶⁴⁾ ⁽⁶⁵⁾ ⁽⁶⁶⁾ ⁽⁶⁷⁾ ⁽⁶⁸⁾ ⁽⁶⁹⁾ ⁽⁷⁰⁾ ⁽⁷¹⁾ ⁽⁷²⁾ ⁽⁷³⁾ ⁽⁷⁴⁾ ⁽⁷⁵⁾ ⁽⁷⁶⁾ ⁽⁷⁷⁾ ⁽⁷⁸⁾ ⁽⁷⁹⁾ ⁽⁸⁰⁾ ⁽⁸¹⁾ ⁽⁸²⁾ ⁽⁸³⁾ ⁽⁸⁴⁾ ⁽⁸⁵⁾ ⁽⁸⁶⁾ ⁽⁸⁷⁾ ⁽⁸⁸⁾ ⁽⁸⁹⁾ ⁽⁹⁰⁾ ⁽⁹¹⁾ ⁽⁹²⁾ ⁽⁹³⁾ ⁽⁹⁴⁾ ⁽⁹⁵⁾ ⁽⁹⁶⁾ ⁽⁹⁷⁾ ⁽⁹⁸⁾ ⁽⁹⁹⁾ ⁽¹⁰⁰⁾ ⁽¹⁰¹⁾ ⁽¹⁰²⁾ ⁽¹⁰³⁾ ⁽¹⁰⁴⁾ ⁽¹⁰⁵⁾ ⁽¹⁰⁶⁾ ⁽¹⁰⁷⁾ ⁽¹⁰⁸⁾ ⁽¹⁰⁹⁾ ⁽¹¹⁰⁾ ⁽¹¹¹⁾ ⁽¹¹²⁾ ⁽¹¹³⁾ ⁽¹¹⁴⁾ ⁽¹¹⁵⁾ ⁽¹¹⁶⁾ ⁽¹¹⁷⁾ ⁽¹¹⁸⁾ ⁽¹¹⁹⁾ ⁽¹²⁰⁾ ⁽¹²¹⁾ ⁽¹²²⁾ ⁽¹²³⁾ ⁽¹²⁴⁾ ⁽¹²⁵⁾ ⁽¹²⁶⁾ ⁽¹²⁷⁾ ⁽¹²⁸⁾ ⁽¹²⁹⁾ ⁽¹³⁰⁾ ⁽¹³¹⁾ ⁽¹³²⁾ ⁽¹³³⁾ ⁽¹³⁴⁾ ⁽¹³⁵⁾ ⁽¹³⁶⁾ ⁽¹³⁷⁾ ⁽¹³⁸⁾ ⁽¹³⁹⁾ ⁽¹⁴⁰⁾ ⁽¹⁴¹⁾ ⁽¹⁴²⁾ ⁽¹⁴³⁾ ⁽¹⁴⁴⁾ ⁽¹⁴⁵⁾ ⁽¹⁴⁶⁾ ⁽¹⁴⁷⁾ ⁽¹⁴⁸⁾ ⁽¹⁴⁹⁾ ⁽¹⁵⁰⁾ ⁽¹⁵¹⁾ ⁽¹⁵²⁾ ⁽¹⁵³⁾ ⁽¹⁵⁴⁾ ⁽¹⁵⁵⁾ ⁽¹⁵⁶⁾ ⁽¹⁵⁷⁾ ⁽¹⁵⁸⁾ ⁽¹⁵⁹⁾ ⁽¹⁶⁰⁾ ⁽¹⁶¹⁾ ⁽¹⁶²⁾ ⁽¹⁶³⁾ ⁽¹⁶⁴⁾ ⁽¹⁶⁵⁾ ⁽¹⁶⁶⁾ ⁽¹⁶⁷⁾ ⁽¹⁶⁸⁾ ⁽¹⁶⁹⁾ ⁽¹⁷⁰⁾ ⁽¹⁷¹⁾ ⁽¹⁷²⁾ ⁽¹⁷³⁾ ⁽¹⁷⁴⁾ ⁽¹⁷⁵⁾ ⁽¹⁷⁶⁾ ⁽¹⁷⁷⁾ ⁽¹⁷⁸⁾ ⁽¹⁷⁹⁾ ⁽¹⁸⁰⁾ ⁽¹⁸¹⁾ ⁽¹⁸²⁾ ⁽¹⁸³⁾ ⁽¹⁸⁴⁾ ⁽¹⁸⁵⁾ ⁽¹⁸⁶⁾ ⁽¹⁸⁷⁾ ⁽¹⁸⁸⁾ ⁽¹⁸⁹⁾ ⁽¹⁹⁰⁾ ⁽¹⁹¹⁾ ⁽¹⁹²⁾ ⁽¹⁹³⁾ ⁽¹⁹⁴⁾ ⁽¹⁹⁵⁾ ⁽¹⁹⁶⁾ ⁽¹⁹⁷⁾ ⁽¹⁹⁸⁾ ⁽¹⁹⁹⁾ ⁽²⁰⁰⁾ ⁽²⁰¹⁾ ⁽²⁰²⁾ ⁽²⁰³⁾ ⁽²⁰⁴⁾ ⁽²⁰⁵⁾ ⁽²⁰⁶⁾ ⁽²⁰⁷⁾ ⁽²⁰⁸⁾ ⁽²⁰⁹⁾ ⁽²¹⁰⁾ ⁽²¹¹⁾ ⁽²¹²⁾ ⁽²¹³⁾ ⁽²¹⁴⁾ ⁽²¹⁵⁾ ⁽²¹⁶⁾ ⁽²¹⁷⁾ ⁽²¹⁸⁾ ⁽²¹⁹⁾ ⁽²²⁰⁾ ⁽²²¹⁾ ⁽²²²⁾ ⁽²²³⁾ ⁽²²⁴⁾ ⁽²²⁵⁾ ⁽²²⁶⁾ ⁽²²⁷⁾ ⁽²²⁸⁾ ⁽²²⁹⁾ ⁽²³⁰⁾ ⁽²³¹⁾ ⁽²³²⁾ ⁽²³³⁾ ⁽²³⁴⁾ ⁽²³⁵⁾ ⁽²³⁶⁾ ⁽²³⁷⁾ ⁽²³⁸⁾ ⁽²³⁹⁾ ⁽²⁴⁰⁾ ⁽²⁴¹⁾ ⁽²⁴²⁾ ⁽²⁴³⁾ ⁽²⁴⁴⁾ ⁽²⁴⁵⁾ ⁽²⁴⁶⁾ ⁽²⁴⁷⁾ ⁽²⁴⁸⁾ ⁽²⁴⁹⁾ ⁽²⁵⁰⁾ ⁽²⁵¹⁾ ⁽²⁵²⁾ ⁽²⁵³⁾ ⁽²⁵⁴⁾ ⁽²⁵⁵⁾ ⁽²⁵⁶⁾ ⁽²⁵⁷⁾ ⁽²⁵⁸⁾ ⁽²⁵⁹⁾ ⁽²⁶⁰⁾ ⁽²⁶¹⁾ ⁽²⁶²⁾ ⁽²⁶³⁾ ⁽²⁶⁴⁾ ⁽²⁶⁵⁾ ⁽²⁶⁶⁾ ⁽²⁶⁷⁾ ⁽²⁶⁸⁾ ⁽²⁶⁹⁾ ⁽²⁷⁰⁾ ⁽²⁷¹⁾ ⁽²⁷²⁾ ⁽²⁷³⁾ ⁽²⁷⁴⁾ ⁽²⁷⁵⁾ ⁽²⁷⁶⁾ ⁽²⁷⁷⁾ ⁽²⁷⁸⁾ ⁽²⁷⁹⁾ ⁽²⁸⁰⁾ ⁽²⁸¹⁾ ⁽²⁸²⁾ ⁽²⁸³⁾ ⁽²⁸⁴⁾ ⁽²⁸⁵⁾ ⁽²⁸⁶⁾ ⁽²⁸⁷⁾ ⁽²⁸⁸⁾ ⁽²⁸⁹⁾ ⁽²⁹⁰⁾ ⁽²⁹¹⁾ ⁽²⁹²⁾ ⁽²⁹³⁾ ⁽²⁹⁴⁾ ⁽²⁹⁵⁾ ⁽²⁹⁶⁾ ⁽²⁹⁷⁾ ⁽²⁹⁸⁾ ⁽²⁹⁹⁾ ⁽³⁰⁰⁾ ⁽³⁰¹⁾ ⁽³⁰²⁾ ⁽³⁰³⁾ ⁽³⁰⁴⁾ ⁽³⁰⁵⁾ ⁽³⁰⁶⁾ ⁽³⁰⁷⁾ ⁽³⁰⁸⁾ ⁽³⁰⁹⁾ ⁽³¹⁰⁾ ⁽³¹¹⁾ ⁽³¹²⁾ ⁽³¹³⁾ ⁽³¹⁴⁾ ⁽³¹⁵⁾ ⁽³¹⁶⁾ ⁽³¹⁷⁾ ⁽³¹⁸⁾ ⁽³¹⁹⁾ ⁽³²⁰⁾ ⁽³²¹⁾ ⁽³²²⁾ ⁽³²³⁾ ⁽³²⁴⁾ ⁽³²⁵⁾ ⁽³²⁶⁾ ⁽³²⁷⁾ ⁽³²⁸⁾ ⁽³²⁹⁾ ⁽³³⁰⁾ ⁽³³¹⁾ ⁽³³²⁾ ⁽³³³⁾ ⁽³³⁴⁾ ⁽³³⁵⁾ ⁽³³⁶⁾ ⁽³³⁷⁾ ⁽³³⁸⁾ ⁽³³⁹⁾ ⁽³⁴⁰⁾ ⁽³⁴¹⁾ ⁽³⁴²⁾ ⁽³⁴³⁾ ⁽³⁴⁴⁾ ⁽³⁴⁵⁾ ⁽³⁴⁶⁾ ⁽³⁴⁷⁾ ⁽³⁴⁸⁾ ⁽³⁴⁹⁾ ⁽³⁵⁰⁾ ⁽³⁵¹⁾ ⁽³⁵²⁾ ⁽³⁵³⁾ ⁽³⁵⁴⁾ ⁽³⁵⁵⁾ ⁽³⁵⁶⁾ ⁽³⁵⁷⁾ ⁽³⁵⁸⁾ ⁽³⁵⁹⁾ ⁽³⁶⁰⁾ ⁽³⁶¹⁾ ⁽³⁶²⁾ ⁽³⁶³⁾ ⁽³⁶⁴⁾ ⁽³⁶⁵⁾ ⁽³⁶⁶⁾ ⁽³⁶⁷⁾ ⁽³⁶⁸⁾ ⁽³⁶⁹⁾ ⁽³⁷⁰⁾ ⁽³⁷¹⁾ ⁽³⁷²⁾ ⁽³⁷³⁾ ⁽³⁷⁴⁾ ⁽³⁷⁵⁾ ⁽³⁷⁶⁾ ⁽³⁷⁷⁾ ⁽³⁷⁸⁾ ⁽³⁷⁹⁾ ⁽³⁸⁰⁾ ⁽³⁸¹⁾ ⁽³⁸²⁾ ⁽³⁸³⁾ ⁽³⁸⁴⁾ ⁽³⁸⁵⁾ ⁽³⁸⁶⁾ ⁽³⁸⁷⁾ ⁽³⁸⁸⁾ ⁽³⁸⁹⁾ ⁽³⁹⁰⁾ ⁽³⁹¹⁾ ⁽³⁹²⁾ ⁽³⁹³⁾ ⁽³⁹⁴⁾ ⁽³⁹⁵⁾ ⁽³⁹⁶⁾ ⁽³⁹⁷⁾ ⁽³⁹⁸⁾ ⁽³⁹⁹⁾ ⁽⁴⁰⁰⁾ ⁽⁴⁰¹⁾ ⁽⁴⁰²⁾ ⁽⁴⁰³⁾ ⁽⁴⁰⁴⁾ ⁽⁴⁰⁵⁾ ⁽⁴⁰⁶⁾ ⁽⁴⁰⁷⁾ ⁽⁴⁰⁸⁾ ⁽⁴⁰⁹⁾ ⁽⁴¹⁰⁾ ⁽⁴¹¹⁾ ⁽⁴¹²⁾ ⁽⁴¹³⁾ ⁽⁴¹⁴⁾ ⁽⁴¹⁵⁾ ⁽⁴¹⁶⁾ ⁽⁴¹⁷⁾ ⁽⁴¹⁸⁾ ⁽⁴¹⁹⁾ ⁽⁴²⁰⁾ ⁽⁴²¹⁾ ⁽⁴²²⁾ ⁽⁴²³⁾ ⁽⁴²⁴⁾ ⁽⁴²⁵⁾ ⁽⁴²⁶⁾ ⁽⁴²⁷⁾ ⁽⁴²⁸⁾ ⁽⁴²⁹⁾ ⁽⁴³⁰⁾ ⁽⁴³¹⁾ ⁽⁴³²⁾ ⁽⁴³³⁾ ⁽⁴³⁴⁾ ⁽⁴³⁵⁾ ⁽⁴³⁶⁾ ⁽⁴³⁷⁾ ⁽⁴³⁸⁾ ⁽⁴³⁹⁾ ⁽⁴⁴⁰⁾ ⁽⁴⁴¹⁾ ⁽⁴⁴²⁾ ⁽⁴⁴³⁾ ⁽⁴⁴⁴⁾ ⁽⁴⁴⁵⁾ ⁽⁴⁴⁶⁾ ⁽⁴⁴⁷⁾ ⁽⁴⁴⁸⁾ ⁽⁴⁴⁹⁾ ⁽⁴⁵⁰⁾ ⁽⁴⁵¹⁾ ⁽⁴⁵²⁾ ⁽⁴⁵³⁾ ⁽⁴⁵⁴⁾ ⁽⁴⁵⁵⁾ ⁽⁴⁵⁶⁾ ⁽⁴⁵⁷⁾ ⁽⁴⁵⁸⁾ ⁽⁴⁵⁹⁾ ⁽⁴⁶⁰⁾ ⁽⁴⁶¹⁾ ⁽⁴⁶²⁾ ⁽⁴⁶³⁾ ⁽⁴⁶⁴⁾ ⁽⁴⁶⁵⁾ ⁽⁴⁶⁶⁾ ⁽⁴⁶⁷⁾ ⁽⁴⁶⁸⁾ ⁽⁴⁶⁹⁾ ⁽⁴⁷⁰⁾ ⁽⁴⁷¹⁾ ⁽⁴⁷²⁾ ⁽⁴⁷³⁾ ⁽⁴⁷⁴⁾ ⁽⁴⁷⁵⁾ ⁽⁴⁷⁶⁾ ⁽⁴⁷⁷⁾ ⁽⁴⁷⁸⁾ ⁽⁴⁷⁹⁾ ⁽⁴⁸⁰⁾ ⁽⁴⁸¹⁾ ⁽⁴⁸²⁾ ⁽⁴⁸³⁾ ⁽⁴⁸⁴⁾ ⁽⁴⁸⁵⁾ ⁽⁴⁸⁶⁾ ⁽⁴⁸⁷⁾ ⁽⁴⁸⁸⁾ ⁽⁴⁸⁹⁾ ⁽⁴⁹⁰⁾ ⁽⁴⁹¹⁾ ⁽⁴⁹²⁾ ⁽⁴⁹³⁾ ⁽⁴⁹⁴⁾ ⁽⁴⁹⁵⁾ ⁽⁴⁹⁶⁾ ⁽⁴⁹⁷⁾ ⁽⁴⁹⁸⁾ ⁽⁴⁹⁹⁾ ⁽⁵⁰⁰⁾ ⁽⁵⁰¹⁾ ⁽⁵⁰²⁾ ⁽⁵⁰³⁾ ⁽⁵⁰⁴⁾ ⁽⁵⁰⁵⁾ ⁽⁵⁰⁶⁾ ⁽⁵⁰⁷⁾ ⁽⁵⁰⁸⁾ ⁽⁵⁰⁹⁾ ⁽⁵¹⁰⁾ ⁽⁵¹¹⁾ ⁽⁵¹²⁾ ⁽⁵¹³⁾ ⁽⁵¹⁴⁾ ⁽⁵¹⁵⁾ ⁽⁵¹⁶⁾ ⁽⁵¹⁷⁾ ⁽⁵¹⁸⁾ ⁽⁵¹⁹⁾ ⁽⁵²⁰⁾ ⁽⁵²¹⁾ ⁽⁵²²⁾ ⁽⁵²³⁾ ⁽⁵²⁴⁾ ⁽⁵²⁵⁾ ⁽⁵²⁶⁾ ⁽⁵²⁷⁾ ⁽⁵²⁸⁾ ⁽⁵²⁹⁾ ⁽⁵³⁰⁾ ⁽⁵³¹⁾ ⁽⁵³²⁾ ⁽⁵³³⁾ ⁽⁵³⁴⁾ ⁽⁵³⁵⁾ ⁽⁵³⁶⁾ ⁽⁵³⁷⁾ ⁽⁵³⁸⁾ ⁽⁵³⁹⁾ ⁽⁵⁴⁰⁾ ⁽⁵⁴¹⁾ ⁽⁵⁴²⁾ ⁽⁵⁴³⁾ ⁽⁵⁴⁴⁾ ⁽⁵⁴⁵⁾ ⁽⁵⁴⁶⁾ ⁽⁵⁴⁷⁾ ⁽⁵⁴⁸⁾ ⁽⁵⁴⁹⁾ ⁽⁵⁵⁰⁾ ⁽⁵⁵¹⁾ ⁽⁵⁵²⁾ ⁽⁵⁵³⁾ ⁽⁵⁵⁴⁾ ⁽⁵⁵⁵⁾ ⁽⁵⁵⁶⁾ ⁽⁵⁵⁷⁾ ⁽⁵⁵⁸⁾ ⁽⁵⁵⁹⁾ ⁽⁵⁶⁰⁾ ⁽⁵⁶¹⁾ ⁽⁵⁶²⁾ ⁽⁵⁶³⁾ ⁽⁵⁶⁴⁾ ⁽⁵⁶⁵⁾ ⁽⁵⁶⁶⁾ ⁽⁵⁶⁷⁾ ⁽⁵⁶⁸⁾ ⁽⁵⁶⁹⁾ ⁽⁵⁷⁰⁾ ⁽⁵⁷¹⁾ ⁽⁵⁷²⁾ ⁽⁵⁷³⁾ ⁽⁵⁷⁴⁾ ⁽⁵⁷⁵⁾ ⁽⁵⁷⁶⁾ ⁽⁵⁷⁷⁾ ⁽⁵⁷⁸⁾ ⁽⁵⁷⁹⁾ ⁽⁵⁸⁰⁾ ⁽⁵⁸¹⁾ ⁽⁵⁸²⁾ ⁽⁵⁸³⁾ ⁽⁵⁸⁴⁾ ⁽⁵⁸⁵⁾ ⁽⁵⁸⁶⁾ ⁽⁵⁸⁷⁾ ⁽⁵⁸⁸⁾ ⁽⁵⁸⁹⁾ ⁽⁵⁹⁰⁾ ⁽⁵⁹¹⁾ ⁽⁵⁹²⁾ ⁽⁵⁹³⁾ ⁽⁵⁹⁴⁾ ⁽⁵⁹⁵⁾ ⁽⁵⁹⁶⁾ ⁽⁵⁹⁷⁾ ⁽⁵⁹⁸⁾ ⁽⁵⁹⁹⁾ ⁽⁶⁰⁰⁾ ⁽⁶⁰¹⁾ ⁽⁶⁰²⁾ ⁽⁶⁰³⁾ ⁽⁶⁰⁴⁾ ⁽⁶⁰⁵⁾ ⁽⁶⁰⁶⁾ ⁽⁶⁰⁷⁾ ⁽⁶⁰⁸⁾ ⁽⁶⁰⁹⁾ ⁽⁶¹⁰⁾ ⁽⁶¹¹⁾ ⁽⁶¹²⁾ ⁽⁶¹³⁾ ⁽⁶¹⁴⁾ ⁽⁶¹⁵⁾ ⁽⁶¹⁶⁾ ⁽⁶¹⁷⁾ ⁽⁶¹⁸⁾ ⁽⁶¹⁹⁾ ⁽⁶²⁰⁾ ⁽⁶²¹⁾ ⁽⁶²²⁾ ⁽⁶²³⁾ ⁽⁶²⁴⁾ ⁽⁶²⁵⁾ ⁽⁶²⁶⁾ ⁽⁶²⁷⁾ ⁽⁶²⁸⁾ ⁽⁶²⁹⁾ ⁽⁶³⁰⁾ ⁽⁶³¹⁾ ⁽⁶³²⁾ ⁽⁶³³⁾ ⁽⁶³⁴⁾ ⁽⁶³⁵⁾ ⁽⁶³⁶⁾ ⁽⁶³⁷⁾ ⁽⁶³⁸⁾ ⁽⁶³⁹⁾ ⁽⁶⁴⁰⁾ ⁽⁶⁴¹⁾ ⁽⁶⁴²⁾ ⁽⁶⁴³⁾ ⁽⁶⁴⁴⁾ ⁽⁶⁴⁵⁾ ⁽⁶⁴⁶⁾ ⁽⁶⁴⁷⁾ ⁽⁶⁴⁸⁾ ⁽⁶⁴⁹⁾ ⁽⁶⁵⁰⁾ ⁽⁶⁵¹⁾ ⁽⁶⁵²⁾ ⁽⁶⁵³⁾ ⁽⁶⁵⁴⁾ ⁽⁶⁵⁵⁾ ⁽⁶⁵⁶⁾ ⁽⁶⁵⁷⁾ ⁽⁶⁵⁸⁾ ⁽⁶⁵⁹⁾ ⁽⁶⁶⁰⁾ ⁽⁶⁶¹⁾ ⁽⁶⁶²⁾ ⁽⁶⁶³⁾ ⁽⁶⁶⁴⁾ ⁽⁶⁶⁵⁾ ⁽⁶⁶⁶⁾ ⁽⁶⁶⁷⁾ ⁽⁶⁶⁸⁾ ⁽⁶⁶⁹⁾ ⁽⁶⁷⁰⁾ ⁽⁶⁷¹⁾ ⁽⁶⁷²⁾ ⁽⁶⁷³⁾ ⁽⁶⁷⁴⁾ ⁽⁶⁷⁵⁾ ⁽⁶⁷⁶⁾ ⁽⁶⁷⁷⁾ ⁽⁶⁷⁸⁾ ⁽⁶⁷⁹⁾ ⁽⁶⁸⁰⁾ ⁽⁶⁸¹⁾ ⁽⁶⁸²⁾ ⁽⁶⁸³⁾ ⁽⁶⁸⁴⁾ ⁽⁶⁸⁵⁾ ⁽⁶⁸⁶⁾ ⁽⁶⁸⁷⁾ ⁽⁶⁸⁸⁾ ⁽⁶⁸⁹⁾ ⁽⁶⁹⁰⁾ ⁽⁶⁹¹⁾ ⁽⁶⁹²⁾ ⁽⁶⁹³⁾ ⁽⁶⁹⁴⁾ ⁽⁶⁹⁵⁾ ⁽⁶⁹⁶⁾ ⁽⁶⁹⁷⁾ ⁽⁶⁹⁸⁾ ⁽⁶⁹⁹⁾ ⁽⁷⁰⁰⁾ ⁽⁷⁰¹⁾ ⁽⁷⁰²⁾ ⁽⁷⁰³⁾ ⁽⁷⁰⁴⁾ ⁽⁷⁰⁵⁾ ⁽⁷⁰⁶⁾ ⁽⁷⁰⁷⁾ ⁽⁷⁰⁸⁾ ⁽⁷⁰⁹⁾ ⁽⁷¹⁰⁾ ⁽⁷¹¹⁾ ⁽⁷¹²⁾ ⁽⁷¹³⁾ ⁽⁷¹⁴⁾ ⁽⁷¹⁵⁾ ⁽⁷¹⁶⁾ ⁽⁷¹⁷⁾ ⁽⁷¹⁸⁾ ⁽⁷¹⁹⁾ ⁽⁷²⁰⁾ ⁽⁷²¹⁾ ⁽⁷²²⁾ ⁽⁷²³⁾ ⁽⁷²⁴⁾ ⁽⁷²⁵⁾ ⁽⁷²⁶⁾ ⁽⁷²⁷⁾ ⁽⁷²⁸⁾ ⁽⁷²⁹⁾ ⁽⁷³⁰⁾ ⁽⁷³¹⁾ ⁽⁷³²⁾ ⁽⁷³³⁾ ⁽⁷³⁴⁾ ⁽⁷³⁵⁾ ⁽⁷³⁶⁾ ⁽⁷³⁷⁾ ⁽⁷³⁸⁾ ⁽⁷³⁹⁾ ⁽⁷⁴⁰⁾ ⁽⁷⁴¹⁾ ⁽⁷⁴²⁾ ⁽⁷⁴³⁾ ⁽⁷⁴⁴⁾ ⁽⁷⁴⁵⁾ ⁽⁷⁴⁶⁾ ⁽⁷⁴⁷⁾ ⁽⁷⁴⁸⁾ ⁽⁷⁴⁹⁾ ⁽⁷⁵⁰⁾ ⁽⁷⁵¹⁾ ⁽⁷⁵²⁾ ⁽⁷⁵³⁾ ⁽⁷⁵⁴⁾ ⁽⁷⁵⁵⁾ ⁽⁷⁵⁶⁾ ⁽⁷⁵⁷⁾ ⁽⁷⁵⁸⁾ ⁽⁷⁵⁹⁾ ⁽⁷⁶⁰⁾ ⁽⁷⁶¹⁾ ⁽⁷⁶²⁾ ⁽⁷⁶³⁾ ⁽⁷⁶⁴⁾ ⁽⁷⁶⁵⁾ ⁽⁷⁶⁶⁾ ⁽⁷⁶⁷⁾ ⁽⁷⁶⁸⁾ ⁽⁷⁶⁹⁾ ⁽⁷⁷⁰⁾ ⁽⁷⁷¹⁾ ⁽⁷⁷²⁾ ⁽⁷⁷³⁾ ⁽⁷⁷⁴⁾ ⁽⁷⁷⁵⁾ ⁽⁷⁷⁶⁾ ⁽⁷⁷⁷⁾ ⁽⁷⁷⁸⁾ ⁽⁷⁷⁹⁾ ⁽⁷⁸⁰⁾ ⁽⁷⁸¹⁾ ⁽⁷⁸²⁾ ⁽⁷⁸³⁾ ⁽⁷⁸⁴⁾ ⁽⁷⁸⁵⁾ ⁽⁷⁸⁶⁾ ⁽⁷⁸⁷⁾ ⁽⁷⁸⁸⁾ ⁽⁷⁸⁹⁾ ⁽⁷⁹⁰⁾ ⁽⁷⁹¹⁾ ⁽⁷⁹²⁾ ⁽⁷⁹³⁾ ⁽⁷⁹⁴⁾ ⁽⁷⁹⁵⁾ ⁽⁷⁹⁶⁾ ⁽⁷⁹⁷⁾ ⁽⁷⁹⁸⁾ ⁽⁷⁹⁹⁾ ⁽⁸⁰⁰⁾ ⁽⁸⁰¹⁾ ⁽⁸⁰²⁾ ⁽⁸⁰³⁾ ⁽⁸⁰⁴⁾ ⁽⁸⁰⁵⁾ ⁽⁸⁰⁶⁾ ⁽⁸⁰⁷⁾ ⁽⁸⁰⁸⁾ ⁽⁸⁰⁹⁾ ⁽⁸¹⁰⁾ ⁽⁸¹¹⁾ ⁽⁸¹²⁾ ⁽⁸¹³⁾ ⁽⁸¹⁴⁾ ⁽⁸¹⁵⁾ ⁽⁸¹⁶⁾ ⁽⁸¹⁷⁾ ⁽⁸¹⁸⁾ ⁽⁸¹⁹⁾ ⁽⁸²⁰⁾ ⁽⁸²¹⁾ ⁽⁸²²⁾ ⁽⁸²³⁾ ⁽⁸²⁴⁾ ⁽⁸²⁵⁾ ⁽⁸²⁶⁾ ⁽⁸²⁷⁾ ⁽⁸²⁸⁾ ⁽⁸²⁹⁾ ⁽⁸³⁰⁾ ⁽⁸³¹⁾ ⁽⁸³²⁾ ⁽⁸³³⁾ ⁽⁸³⁴⁾ ⁽⁸³⁵⁾ ⁽⁸³⁶⁾ ⁽⁸³⁷⁾ ⁽⁸³⁸⁾ ⁽⁸³⁹⁾ ⁽⁸⁴⁰⁾ ⁽⁸⁴¹⁾ ⁽⁸⁴²⁾ ⁽⁸⁴³⁾ ⁽⁸⁴⁴⁾ ⁽⁸⁴⁵⁾ ⁽⁸⁴⁶⁾ ⁽⁸⁴⁷⁾ ⁽⁸⁴⁸⁾ ⁽⁸⁴⁹⁾ ⁽⁸⁵⁰⁾ ⁽⁸⁵¹⁾ ⁽⁸⁵²⁾ ⁽⁸⁵³⁾ ⁽⁸⁵⁴⁾ ⁽⁸⁵⁵⁾ ⁽⁸⁵⁶⁾ ⁽⁸⁵⁷⁾ ⁽⁸⁵⁸⁾ ⁽⁸⁵⁹⁾ ⁽⁸⁶⁰⁾ ⁽⁸⁶¹⁾ ⁽⁸⁶²⁾ ⁽⁸⁶³⁾ ⁽⁸⁶⁴⁾ ⁽⁸⁶⁵⁾ ⁽⁸⁶⁶⁾ ⁽⁸⁶⁷⁾ ⁽⁸⁶⁸⁾ ⁽⁸⁶⁹⁾ ⁽⁸⁷⁰⁾ ⁽⁸⁷¹⁾ ⁽⁸⁷²⁾ ⁽⁸⁷³⁾ ⁽⁸⁷⁴⁾ ⁽⁸⁷⁵⁾ ⁽⁸⁷⁶⁾ ⁽⁸⁷⁷⁾ ⁽⁸⁷⁸⁾ ⁽⁸⁷⁹⁾ ⁽⁸⁸⁰⁾ ⁽⁸⁸¹⁾ ⁽⁸⁸²⁾ ⁽⁸⁸³⁾ ⁽⁸⁸⁴⁾ ⁽⁸⁸⁵⁾ ⁽⁸⁸⁶⁾ ⁽⁸⁸⁷⁾ ⁽⁸⁸⁸⁾ ⁽⁸⁸⁹⁾ ⁽⁸⁹⁰⁾ ⁽⁸⁹¹⁾ ⁽⁸⁹²⁾ ⁽⁸⁹³⁾ ⁽⁸⁹⁴⁾ ⁽⁸⁹⁵⁾ ⁽⁸⁹⁶⁾ ⁽⁸⁹⁷⁾ ⁽⁸⁹⁸⁾ ⁽⁸⁹⁹⁾ ⁽⁹⁰⁰⁾ ⁽⁹⁰¹⁾ ⁽⁹⁰²⁾ ⁽⁹⁰³⁾ ⁽⁹⁰⁴⁾ ⁽⁹⁰⁵⁾ ⁽⁹⁰⁶⁾ ⁽⁹⁰⁷⁾ ⁽⁹⁰⁸⁾ ⁽⁹⁰⁹⁾ ⁽⁹¹⁰⁾ ⁽⁹¹¹⁾ ⁽⁹¹²⁾ ⁽⁹¹³⁾ ⁽⁹¹⁴⁾ ⁽⁹¹⁵⁾ ⁽⁹¹⁶⁾ ⁽⁹¹⁷⁾ ⁽⁹¹⁸⁾ ⁽⁹¹⁹⁾ ⁽⁹²⁰⁾ ⁽⁹²¹⁾ ⁽⁹²²⁾ ⁽⁹²³⁾ ⁽⁹²⁴⁾ ⁽⁹²⁵⁾ ⁽⁹²⁶⁾ ⁽⁹²⁷⁾ ⁽⁹²⁸⁾ ⁽⁹²⁹⁾ ⁽⁹³⁰⁾ ⁽⁹³¹⁾ ⁽⁹³²⁾ ⁽⁹³³⁾ ⁽⁹³⁴⁾ ⁽⁹³⁵⁾ ⁽⁹³⁶⁾ ⁽⁹³⁷⁾ ⁽⁹³⁸⁾ ⁽⁹³⁹⁾ ⁽⁹⁴⁰⁾ ⁽⁹⁴¹⁾ ⁽⁹⁴²⁾ ⁽⁹⁴³⁾ ⁽⁹⁴⁴⁾ ⁽⁹⁴⁵⁾ ⁽⁹⁴⁶⁾ ⁽⁹⁴⁷⁾ ⁽⁹⁴⁸⁾ ⁽⁹⁴⁹⁾ ⁽⁹⁵⁰⁾ ⁽⁹⁵¹⁾ ⁽⁹⁵²⁾ ⁽⁹⁵³⁾ ⁽⁹⁵⁴⁾ ⁽⁹⁵⁵⁾ ⁽⁹⁵⁶⁾ ⁽⁹⁵⁷⁾ ⁽⁹⁵⁸⁾ ⁽⁹⁵⁹⁾ ⁽⁹⁶⁰⁾ ⁽⁹⁶¹⁾ ⁽⁹⁶²⁾ ⁽⁹⁶³⁾ ⁽⁹⁶⁴⁾ ⁽⁹⁶⁵⁾ ⁽⁹⁶⁶⁾ ⁽⁹⁶⁷⁾ ⁽⁹⁶⁸⁾ ⁽⁹⁶⁹⁾ ⁽⁹⁷⁰⁾ ⁽⁹⁷¹⁾ ⁽⁹⁷²⁾ ⁽⁹⁷³⁾ ⁽⁹⁷⁴⁾ ⁽⁹⁷⁵⁾ ⁽⁹⁷⁶⁾ ⁽⁹⁷⁷⁾ ⁽⁹⁷⁸⁾ ⁽⁹⁷⁹⁾ ⁽⁹⁸⁰⁾ ⁽⁹⁸¹⁾ ⁽⁹⁸²⁾ ⁽⁹⁸³⁾ ⁽⁹⁸⁴⁾ ⁽⁹⁸⁵⁾ ⁽⁹⁸⁶⁾ ⁽⁹⁸⁷⁾ ⁽⁹⁸⁸⁾ ⁽⁹⁸⁹⁾ ⁽⁹⁹⁰⁾ ⁽⁹⁹¹⁾ ⁽⁹⁹²⁾ ⁽⁹⁹³⁾ ⁽⁹⁹⁴⁾ ⁽⁹⁹⁵⁾ ⁽⁹⁹⁶⁾ ⁽⁹⁹⁷⁾ ⁽⁹⁹⁸⁾ ⁽⁹⁹⁹⁾ ⁽¹⁰⁰⁰⁾ ⁽¹⁰⁰¹⁾ ⁽¹⁰⁰²⁾ ⁽¹⁰⁰³⁾ ⁽¹⁰⁰⁴⁾ ⁽¹⁰⁰⁵⁾ ⁽¹⁰⁰⁶⁾ ⁽¹⁰⁰⁷⁾ ⁽¹⁰⁰⁸⁾ ⁽¹⁰⁰⁹⁾ ⁽¹⁰¹⁰⁾ ⁽¹⁰¹¹⁾ ⁽¹⁰¹²⁾ ⁽¹⁰¹³⁾ ⁽¹⁰¹⁴⁾ ⁽¹⁰¹⁵⁾ ⁽¹⁰¹⁶⁾ ⁽¹⁰¹⁷⁾ ⁽¹⁰¹⁸⁾ ⁽¹⁰¹⁹⁾ ⁽¹⁰²⁰⁾ ⁽¹⁰²¹⁾ ⁽¹⁰²²⁾ ⁽¹⁰²³⁾ ⁽¹⁰²⁴⁾ ⁽¹⁰²⁵⁾ ⁽¹⁰²⁶⁾ ⁽¹⁰²⁷⁾ ⁽¹⁰²⁸⁾ ⁽¹⁰²⁹⁾ ⁽¹⁰³⁰⁾ ⁽¹⁰³¹⁾ ⁽¹⁰³²⁾ ⁽¹⁰³³⁾ ⁽¹⁰³⁴⁾ ⁽¹⁰³⁵⁾ ⁽¹⁰³⁶⁾ ⁽¹⁰³⁷⁾ ⁽¹⁰³⁸⁾ ⁽¹⁰³⁹⁾ ⁽¹⁰⁴⁰⁾ ⁽¹⁰⁴¹⁾ ⁽¹⁰⁴²⁾ ⁽¹⁰⁴³⁾ ⁽¹⁰⁴⁴⁾ ⁽¹⁰⁴⁵⁾ ⁽¹⁰⁴⁶⁾ ⁽¹⁰⁴⁷⁾ ⁽¹⁰⁴⁸⁾ ⁽¹⁰⁴⁹⁾ ⁽¹⁰⁵⁰⁾ ⁽¹⁰⁵¹⁾ ⁽¹⁰⁵²⁾ ⁽¹⁰⁵³⁾ ⁽¹⁰⁵⁴⁾ ⁽¹⁰⁵⁵⁾ ⁽¹⁰⁵⁶⁾ ⁽¹⁰⁵⁷⁾ ⁽¹⁰⁵⁸⁾ ⁽¹⁰⁵⁹⁾ ⁽¹⁰⁶⁰⁾ ⁽¹⁰⁶¹⁾ ⁽¹⁰⁶²⁾ ⁽¹⁰⁶³⁾ ⁽¹⁰⁶⁴⁾ ⁽¹⁰⁶⁵⁾ ⁽¹⁰⁶⁶⁾ ⁽¹⁰⁶⁷⁾ ⁽¹⁰⁶⁸⁾ ⁽¹⁰⁶⁹⁾ ⁽¹⁰⁷⁰⁾ ⁽¹⁰⁷¹⁾ ⁽¹⁰⁷²⁾ ⁽¹⁰⁷³⁾ ⁽¹⁰⁷⁴⁾ ⁽¹⁰⁷⁵⁾ ⁽¹⁰⁷⁶⁾ ⁽¹⁰⁷⁷⁾ ⁽¹⁰⁷⁸⁾ ⁽¹⁰⁷⁹⁾ ⁽¹⁰⁸⁰⁾ ⁽¹⁰⁸¹⁾ ⁽¹⁰⁸²⁾ ⁽¹⁰⁸³⁾ ⁽¹⁰⁸⁴⁾ ⁽¹⁰⁸⁵⁾ ⁽¹⁰⁸⁶⁾ ⁽¹⁰⁸⁷⁾ ⁽¹⁰⁸⁸⁾ ⁽¹⁰⁸⁹⁾ ⁽¹⁰⁹⁰⁾ ⁽¹⁰⁹¹⁾ ⁽¹⁰⁹²⁾ ⁽¹⁰⁹³⁾ ⁽¹⁰⁹⁴⁾ ⁽¹⁰⁹⁵⁾ ⁽¹⁰⁹⁶⁾ ⁽¹⁰⁹⁷⁾ ⁽¹⁰⁹⁸⁾ ⁽¹⁰⁹⁹⁾ ⁽¹¹⁰⁰⁾ ⁽¹¹⁰¹⁾ ⁽¹¹⁰²⁾ ⁽¹¹⁰³⁾ ⁽¹¹⁰⁴⁾ ⁽¹¹⁰⁵⁾ ⁽¹¹⁰⁶⁾ ⁽¹¹⁰⁷⁾ ⁽¹¹⁰⁸⁾ ⁽¹¹⁰⁹⁾ ⁽¹¹¹⁰⁾ ⁽¹¹¹¹⁾ ⁽¹¹¹²⁾ ⁽¹¹¹³⁾ ⁽¹¹¹⁴⁾ ⁽¹¹¹⁵⁾ ⁽¹¹¹⁶⁾ ⁽¹¹¹⁷⁾ ⁽¹¹¹⁸⁾ ⁽¹¹¹⁹⁾ ⁽¹¹²⁰⁾ ⁽¹¹²¹⁾ ⁽¹¹²²⁾ ⁽¹¹²³⁾ ⁽¹¹²⁴⁾ ⁽¹¹²⁵⁾ ⁽¹¹²⁶⁾ ⁽¹¹²⁷⁾ ⁽¹¹²⁸⁾ ⁽¹¹²⁹⁾ ⁽¹¹³⁰⁾ ⁽¹¹³¹⁾ ⁽¹¹³²⁾ ⁽¹¹³³⁾ ⁽¹¹³⁴⁾ ⁽¹¹³⁵⁾ ⁽¹¹³⁶⁾ ⁽¹¹³⁷⁾ ⁽¹¹³⁸⁾ ⁽¹¹³⁹⁾ ⁽¹¹⁴⁰⁾ ⁽¹¹⁴¹⁾ ⁽¹¹⁴²⁾ ⁽¹¹⁴³⁾ ⁽¹¹⁴⁴⁾ ⁽¹¹⁴⁵⁾ ⁽¹¹⁴⁶⁾ ⁽¹¹⁴⁷⁾ ⁽¹¹⁴⁸⁾ ⁽¹¹⁴⁹⁾ ⁽¹¹⁵⁰⁾ ⁽¹¹⁵¹⁾ ⁽¹¹⁵²⁾ ⁽¹¹⁵³⁾ ⁽¹¹⁵⁴⁾ ⁽¹¹⁵⁵⁾ ⁽¹¹⁵⁶⁾ ⁽¹¹⁵⁷⁾ ⁽¹¹⁵⁸⁾ ⁽¹¹⁵⁹⁾ ⁽¹¹⁶⁰⁾ ⁽¹¹⁶¹⁾ ⁽¹¹⁶²⁾ ⁽¹¹⁶³⁾ ⁽¹¹⁶⁴⁾ ⁽¹¹⁶⁵⁾ ⁽¹¹⁶⁶⁾ ⁽¹¹⁶⁷⁾ ⁽¹¹⁶⁸⁾ ⁽¹¹⁶⁹⁾ ⁽¹¹⁷⁰⁾ ⁽¹¹⁷¹⁾ ⁽¹¹⁷²⁾ ⁽¹¹⁷³⁾ ⁽¹¹⁷⁴⁾ ⁽¹¹⁷⁵⁾ ⁽¹¹⁷⁶⁾ ⁽¹¹⁷⁷⁾ ⁽¹¹⁷⁸⁾ ⁽¹¹⁷⁹⁾ ⁽¹¹⁸⁰⁾ ⁽¹¹⁸¹⁾ ⁽¹¹⁸²⁾ ⁽¹¹⁸³⁾ ⁽¹¹⁸⁴⁾ ⁽¹¹⁸⁵⁾ ⁽¹¹⁸⁶⁾ ⁽¹¹⁸⁷⁾ ⁽¹¹⁸⁸⁾ ⁽¹¹⁸⁹⁾ ⁽¹¹⁹⁰⁾ ⁽¹¹⁹¹⁾ ⁽¹¹⁹²⁾ ⁽¹¹⁹³⁾ ⁽¹¹⁹⁴⁾ ⁽¹¹⁹⁵⁾ ⁽¹¹⁹⁶⁾ ⁽¹¹⁹⁷⁾ ⁽¹¹⁹⁸⁾ ⁽¹¹⁹⁹⁾ ⁽¹²⁰⁰⁾ ⁽¹²⁰¹⁾ ⁽¹²⁰²⁾ ⁽¹²⁰³⁾ ⁽¹²⁰⁴⁾ ⁽¹²⁰⁵⁾ ⁽¹²⁰⁶⁾ ⁽¹²⁰⁷⁾ ⁽¹²⁰⁸⁾ ⁽¹²⁰⁹⁾ ⁽¹²¹⁰⁾ ⁽¹²¹¹⁾ ⁽¹²¹²⁾ ⁽¹²¹³⁾ ⁽¹²¹⁴⁾ ⁽¹²¹⁵⁾ ⁽¹²¹⁶⁾ ⁽¹²¹⁷⁾ ⁽¹²¹⁸⁾ ⁽¹²¹⁹⁾ ⁽¹²²⁰⁾ ⁽¹²²¹⁾ ⁽¹²²²⁾ ⁽¹²²³⁾ ⁽¹²²⁴⁾ ⁽¹²²⁵⁾ ⁽¹²²⁶⁾ ⁽¹²²⁷⁾ ⁽¹²²⁸⁾ ⁽¹²²⁹⁾ ⁽¹²³⁰⁾ ⁽¹²³¹⁾ ⁽¹²³²⁾ ⁽¹²³³⁾ ⁽¹²³⁴⁾ ⁽¹²³⁵⁾ ⁽¹²³⁶⁾ ⁽¹²³⁷⁾ ⁽¹²³⁸⁾ ⁽¹²³⁹⁾ ⁽¹²⁴⁰⁾ ⁽¹²⁴¹⁾ ⁽¹²⁴²⁾ ⁽¹²⁴³⁾ ⁽¹²⁴⁴⁾ ⁽¹²⁴⁵⁾ ⁽¹²⁴⁶⁾ ⁽¹²⁴⁷⁾ ⁽¹²⁴⁸⁾ ⁽¹²⁴⁹⁾ ⁽¹²⁵⁰⁾ ⁽¹²⁵¹⁾ ⁽¹²⁵²⁾ ⁽¹²⁵³⁾ ⁽¹²⁵⁴⁾ ⁽¹²⁵⁵⁾ ⁽¹²⁵⁶⁾ ⁽¹²⁵⁷⁾ ⁽¹²⁵⁸⁾ ⁽¹²⁵⁹⁾ ⁽¹²⁶⁰⁾ ⁽¹²⁶¹⁾ ⁽¹²⁶²⁾ ⁽¹²⁶³⁾ ⁽¹²⁶⁴⁾ ⁽¹²⁶⁵⁾ ⁽¹²⁶⁶⁾ ⁽¹²⁶⁷⁾ ⁽¹²⁶⁸⁾ ⁽¹²⁶⁹⁾ ⁽¹²⁷⁰⁾ ⁽¹²⁷¹⁾ ⁽¹²⁷²⁾ ⁽¹²⁷³⁾ ⁽¹²⁷⁴⁾ ⁽¹²⁷⁵⁾ ⁽¹²⁷⁶⁾ ⁽¹²⁷⁷⁾ ⁽¹²⁷⁸⁾ ⁽¹²⁷⁹⁾ ⁽¹²⁸⁰⁾ ⁽¹²⁸¹⁾ ⁽¹²⁸²⁾ ⁽¹²⁸³⁾ ⁽¹²⁸⁴⁾ ⁽¹²⁸⁵⁾ ⁽¹²⁸⁶⁾ ⁽¹²⁸⁷⁾ ⁽¹²⁸⁸⁾ ⁽¹²⁸⁹⁾ ⁽¹²⁹⁰⁾ ⁽¹²⁹¹⁾ ⁽¹²⁹²⁾ ⁽¹²⁹³⁾ ⁽¹²⁹⁴⁾ ⁽¹²⁹⁵⁾ ⁽¹²⁹⁶⁾ ⁽¹²⁹⁷⁾ ⁽¹²⁹⁸⁾ ⁽¹²⁹⁹⁾ ⁽¹³⁰⁰⁾ ⁽¹³⁰¹⁾ ⁽¹³⁰²⁾ ⁽¹³⁰³⁾ ⁽¹³⁰⁴⁾ ⁽¹³⁰⁵⁾ ⁽¹³⁰⁶⁾ ⁽¹³⁰⁷⁾ ⁽¹³⁰⁸⁾ ⁽¹³⁰⁹⁾ ⁽¹³¹⁰⁾ <

これ等上掲の例は旱魃時に於いて雨を得んとして雨滴に類似する水滴を以てした homocopathic or imitative magic のそれであつて、樅朴子の吹氣して雲を集め龍を浮出し雨を得るといふ類例を解くに参考となるものである。

次ぎに方士が常に少水を以て小龍を畜養して置くといふ記載であるが、その小龍と言はれるのは決して眞の龍ではなく、之れは rain maker は必ず雨乞儀式に關與するものであり、雨乞儀式に mystic animal 或は insect を rain charm に使用するものであることが、世界的に共通してゐる風習であるといふことを知ると、少水を以て龍を畜養するといふ一見不可解と思惟される此の記載も何等仔細もなく又少しの矛盾もなく解くことが出来るのである。處で此の mystic animal を諸雨の儀式に rain charm として使用するに就いては、國が變り處を異にすると其の地方獨特の動物が用ひられてゐるから以下三四の例を示して樅朴子の文を解釋するの參考に供すると中部 Australia の Arunta 族の北方に當つてゐる Tjingili 部族間では袋狸が使用されてゐる。その方法を示すと

A fat bandicoot in caught, care being taken not to injure it. A man belonging to a special moiety of the tribe then wraps it up in paper-bark and carries it about in a pichi (hollowed trough), singing over it until such time as it becomes very thin and weak. Then he lets it go, and the rain is supposed to follow.

とあるのがそれである。⁽²⁾又同じく Australia の Mumbakuku totem の人々は蛇を rain charm

に使用して居る。其の例を示すべし。

A man of the Mumbakutaku totem can make rain by catching a snake and putting it alive into the water-hole. 'After holding it under for a little time, he brings it out, kills it, and lays it down by the side of the creek. Then, in imitation of a rainbow, he makes an arched bundle of grass stalks . . . and sets it up over the snake. All that he then does is to sing over the snake and the imitation rainbow, and sooner or later the rain falls.'

とあるのがそれである。(2)また Ainu 人は熊を以て請雨儀式に使用してゐる、其の例を示すべし。

When men go to the fisheries they take the skulls of the animals with them. The reason is that when the weather is continuously calm, and the men have to work incessantly both by day and by night, they get tired and long for a rest. At such calms they take out their racoon skulls at night and pray to them. The prayer used is: "This calm is lasting too long; we are very tired; please send us bad weather, so that we may not be able to work." After this prayer has been said they throw water over one another and make merry. If this be done properly, bad storms are certain to follow, and then the people get rest and are greatly rejoiced. As soon as the rough weather begins the men buy saké, worship, and offer libations to the skull; if very bad weather indeed is required, the people make gloves and caps of racoon and marten skins, put them on and dance.

とあるのはそれである。(3) 其の外水と密接な關係を持つてゐる動物例へば蛙、蟾蜍などは雨

の支配者としては世界的に共通な觀念を抱かれてゐるが爲め、旱魃に際して雨を得んとする時には *rain charm* とされるものであり、また黒雲を聯想する黒色の獸類なども *rain charm* に使用されるが、此等の例は此處では割愛することとする⁽³⁷⁾。

扱て上掲の *rain charm* の例で、袋狸を以てする *Tjinglii* 部族の場合を見ると、特別階級の者即ち *shaman* が其の獸を *paperbark* にて包んだり、またそれを囲める木鉢に入れたり、呪文祝文を唱へたりしてゐるのであつて、これは袋狸が靈的な獸と考へられてゐるから、此の靈獸を取扱ふ者は矢張り *shaman* に限らるゝのであらうと思はれる。また *Ainu* 人の間で熊が靈獸と考へられてゐることは頗る有名であるが、それが靈的に取扱はれてゐるが爲めに、降雨を願ふ時にも熊の頭蓋骨などが取り出されて祈りの對象となるのである。其外 *Mumbakuku* 部族間で *rain charm* に蛇を使用するのも、彼等が蛇を靈視し、それが雨を支配するものであるといふ信念を持つてゐたが爲めであり、蛙や蟾蜍が請雨呪術に役立つのも、黒獸が用ひられるのも共に彼等が *mystic animal* として靈視され雨神と相通ずることが出来ると思惟されたからである。

支那に於いても蛙、蝦蟇などが請雨の儀式に使用されたことは古代文獻に見出される⁽³⁸⁾し、守宮や蜥蜴や蛇醫などいふ小動物も *rain making* の場合には必要なものとされてゐたやうである。即ち蛇醫を水を盛れる壺中に容れ置いて *rain making* の *charm* と爲したことは後世の文獻ではあるが、唐の段成式の酉陽雜俎などに見えて居り、また水を貯へた甕中に蜥蜴

を泛べて甘雨を得る *charm* となしてゐる例は、宋の張師正の倦遊雜錄に記されてゐるので、その事が了解される。また唐宋頃よりは更に遠く遡つて古代の典籍にも同じく小動物であり、蜥蜴蛇醫に類する蛇が雲霧を興すといふやうな文獻の多くあるに參照し、同時に彼等古代支那人が旱魃に際して澍雨甘雨の降下を願ふの念の痛切であつたこと、而して古代支那人の心理上の判斷では旱魃現象は天の精靈が作爲する結果であるとされてゐたこと、従つて現世に於いて天の精靈と交驩し得る唯一の者即ち巫覡が、旱魃時に降雨を祈願する儀式に缺く可からざる者であり、重要な役割を演じたのであることを思ふ時、職務上夏時旱天に際して請雨儀式に依頼される巫覡としては、自己の有つ神祕の力を更に神祕にし、それによつて生活の富裕を來すを望む彼等としては、旱魃胥祭に應ずる爲めの用意をば常に忘れず、前掲の如き小動物即ち蛇醫とか蜥蜴とか、或は守宮、或は蛙、或は蟾蜍、或は蛇などいふ所謂 *mystic animal* を壺甕の中に畜養し置き、雨乞儀式に招請されることがあれば直ちにそれ等畜養の小動物を齎して現地に赴き、雨師 (*rain maker*) としての *shaman* の任務を果して金錢物資を收得し、以て彼等の生活を支持してゐたといふことはあり得べきことで、其處に巫覡階級の存在が認められる。山海經に、

雨師妾在甘北、其爲人黑、兩手各操一蛇、

とある文獻の如きは、雨師 (*rain maker*) としての職業 *shaman* の家で、雨乞の時使用する目的で蛇を養つてゐたことを推定することの出来るものであるが、これと同様に、先きに擧げて置

いた褒姒傳に、

昔自夏后氏之衰也、有二神龍止於夏帝庭、而言曰、余褒之二君、夏帝卜殺之、與去之、與止之、莫吉、卜請其幣而藏之、乃吉、於是布幣而策告之、龍亡而幣在、櫝而去之、夏亡傳此器、殷亡又傳此器、周比三代莫敢發之、至厲王之末、發而觀之、幣流于庭、不可除、厲王使婦人裸而譟之。

とある文字があり、其處に櫝といふ器が見えるが、其の櫝に最初龍を容れてあつたと思はれるのは、龍が亡びて幣が其の櫝に残つてゐたといふ記事があるので分るが、兎に角此の文獻でその昔櫝といふ器に小動物を畜養してゐた shaman 階級が存在してゐたらうといふことなどが推考される。

それからまた直接雨乞儀式に使用する目的ではなくとも、蜥蜴や蛇などを壺器の中に畜養してゐた例は、古昔の典籍ではなく、やゝ後世のものであるが、屢々見出されるから參考に舉げて置くと、晋張華の博物志に、

蜥蜴或名蜺蜥、以器養之、食以硃砂、體盡赤、所食滿七斤、治瘳之萬杵、點女人支體、終年不滅、唯房室事則滅、故號守宮、

とある如き、また宋劉敬叔の異苑錄に、

圓陽鐘忠以元嘉冬月晨行、見有一蛇長二尺許、文色似青琉璃、頭有雙角、白如玉、感而畜之、於是貨業日登、經年蛇自亡去、忠及二子相續殞斃、此蛇來吉去凶、其唯龍乎、
とある如き、また南宋魯應龍の間窓括異記に、

李舟之弟患風、或云蛇酒治風、乃求黑蛇、生置瓮中、醢以麴蘖、數日蛇聲不絕、乃熟香氣酷烈、引酒而飲、斯須之間悉化爲水、惟毛髮存焉、

とある如きはそれである。⁽⁴⁸⁾

擬て斯くの如き宋唐南北朝頃の文獻に據り更に山海經、史記の襄姒傳説などを参照すると、古代支那の巫覡階級の者等の中には、小動物を壺中に畜養してゐたらうといふことが推察されるが、それが *mystic animal* であり、従つて雨を降らせる力があるとの信仰があり、それを取扱ふ巫覡が呪術を以て其の *mystic animal* の靈力を補助する能力があつたとしても、樵朴子の記載の如く、僅か數寸の龍と稱せられる小動物を、方士の禹步吹氣の呪術によつて、輒ち數十丈ほどもある龍態に變化させ得るといふことは實際としては考へられないから、恐らく樵朴子の敘述は、靈獸を以て降雨を祈る *magic art* を、恰度漢代の舞樂技術者が爲したと同じ様に、淵泉の傍で實演したのであつて、これは早魃もそれが極に達すると、最早や降雨現象を來すのが自然の理であるから、其の經驗に基いて巫覡階級が *rain charm* を以て沼潭の傍で呪呪すれば、偶々黒雲集り、澍雨降下するなどいふ天然の氣象に變化を來すなどいふことは常にあり得ること、斯ることが巫覡階級の者に依つて書き殘さるゝ時は、彼等の神祕力を益々神祕にせんとして、畜養してゐた靈獸は小龍と記され、更にその小龍は彼等の呪術の結果大龍と變じ雲を起すに至り、雨を齎すことゝなつたと言はるゝに至るのである。而して其の小龍が禹步吹氣の結果大龍となつたと書かれるならば、當然また其の大龍が巫

魂の靈力呪術の力で數寸のものに縮小せしめられ、壺中に畜養さるゝに至ると記さるゝのは合理的な順序であり、物語にも興味を添へる所以でもある。

斯くの如く論じて來ると元來龍なるものは天空にあつて雲雨などを掌る精靈と同一なものであり、従つて御龍氏・參龍氏などいふ古代の巫覡は天帝と現世の中間に介在して精靈たる此の龍を左右したのであるといふことになつて居るので、此の點からすれば龍は全く思想的の所産と見られるのであるが、一方民間的に行はれた雨乞の儀式に、盛に *mystic animal* が使用され、其の *mystic animal* を取扱ふ者が巫覡であつたので、此の *mystic animal* は *rain charm* として雨を得んとした信仰は、旋てまた天空に於いて雲雨を掌つてゐると考へられた思想的所産の龍との結合を來し、其の靈獸の有つてゐる靈力は、天の精靈即ち龍に感應するものと思はれ、雨の降下を掌る天の精靈を思想的に龍と稱する時、此の龍と感應すると思惟された小動物が同様に龍と稱されるにも不思議は無く、さすれば、樵朴子に小龍を水を以て養ふとある如きも、それは *mystic animal* を畜養してゐたことゝなる譯である。斯くて遂には思想的、無形的な精靈の一種たる龍が、具體的、有形的な動物の一種でもあるかの如き龍にまで進展し、蛇とか蜥蜴とか守宮とか蛇醫とかいふ雨乞儀式に關係深き *mystic animal* の形態をとるに至つたのであらうと考へられる。思想的の龍が此等 *mystic animal* の形態をとるに至つた展開の徑路は別篇に詳しく論ずることとする。

註

- 1 東洋學報、第貳拾壹卷、第二號、拙稿「龍の形態に就いての考察」參照。
- 2 史記股本紀に「祖乙遷于邢」とある條の註に邢晉耿とあり、また括地志云、絳州龍門縣東南十二里耿城故耿國也ともあるが、此の絳州龍門縣などいふ地名の起源は、龍が絳郊に現はれたなどいふ傳説に結合してゐるかの如く思はれて頗る興味深きを覺える。
- 3 左傳、昭公二十九年の條。
- 4 史記、卷二、夏本紀。
- 5 東洋學報、第貳拾壹卷、第一號、拙稿「龍の形態に就いての考察」參照。
- 6 東亞研究、卷二、第四號「尙書の高等批評（特に堯舜に就いて）」參照。
- 7 史記、卷二十八。
- 8 博物志、卷二。
- 9 日本書紀「天孫降臨の章」參照。
- 10 史記、卷三の股本紀、卷四の周本紀參照。
- 11 Frazer, Lectures on the Early History of the Kingship.
- 12 東洋學報、第拾五卷、第四號。
- 13 史記、卷四、周本紀。
- 14 同上。
- 15 史記、卷三、股本紀、殷の始祖契の誕生傳説參照。
- 16 斯かる例として、史記、卷三の股本紀に「帝武乙無道、爲偶人、謂之天神、與之博、令人爲行、天神不勝、乃僇辱之、爲革囊盛血、仰而射之、命曰射天、武乙獵於河謂之間、暴雷、武乙震死」といふ武乙の傳説が見えるから掲げて置く。
- 17 古代に於いては、天帝が地上に君臨する天子の狀態を知らむが爲めに、使者として龍を下すなどいふ思想は當然あり得べきことで、例へば日本の神話に、天照大神が天忍穗耳命を天降らし

めんとし、先づ天菩比神を遣はして下界の荒神を言ゴトム趣けしめんとしたが、天菩比神は大國主神に媚びて復奏しなかつたので、次に天若日子を遣はせし處、これまた大國主神の女下照比賣を娶つて復奏しなかつた。そこで雉名鳴女を遣はした處、天佐具賣が天若日子に「此の鳥は鳴く音甚惡し故射殺したまひね」と進めたので天若日子は此の雉を射殺したといふ物語があるが（古事記）これなどは天帝の使者として雉が天界から下されたといふ思想であつて、支那に於いて天帝の使者として龍とか玄鳥とかいふものが下界に降される觀念と類するものであらう。抱朴子、内篇佚文參照。

19 龍と靈とが觀念上起源を同一にしてゐることに就いては、後篇に於いて、龍と靈とを音韻の方面から詳論する考へである。參照されたい。

20 漢書、卷九十六下、西域傳。

21 前漢の武帝の建元元年が西紀前一四〇年で、後漢の安帝の末年延光四年が西曆一二五年で、此の二百六、七十年間、漫延魚龍などいふ戲が廢止されずに宮廷内に持續して行はれたとすれば、晉の葛洪が抱朴子を篇する頃までは、斯る戲術が演ぜられてゐたと推測しても差し支へは無からうと思ふ。

22 現行本後漢書の本紀列傳の註は、唐の高宗の時章懷太子が儒者を集めて作つたもので、禮儀志の註と區別する爲め特に章懷太子註と斷つて置いた。

23 現行本後漢書の禮儀志は、司馬彪の續漢書のそれで、宋代范曄が撰した後漢書と合併されて後漢書の名稱を持つて今日に及んでゐるが、従つて註（22）に於いて述べた如く、其の註も本紀列傳のとは異なり梁の劉昭が續漢書に加へた補註を其のまゝ襲用してゐるのである。

24 東洋學報、第貳拾壹卷、第二號、拙稿、龍の形態に就いての考察參照。

25 漢書卷九十六下、西域傳の註參照。

26 康熙字典、「𪛗」字參照。

參龍氏御龍氏に就いての臆說

27 禁固は禁呪の誤字か、また水人とは、國語には「水人居水」とあるので辭源に「謂習於水者」とあるのが當を得てゐるやうである。俚兒は博物志に「交州夷名曰俚子」とある俚子に當つてゐる如く思はれ、それがまた李善註に「水人俚兒」とあるのを見ると南方廣東地方の黎人などを指して居るものと考へられる。現に辭源俚の條には「種族名即今廣東之黎人」とある。

28 辭源、角觥の條参照。

29 漢書、卷九十六下、西域傳。

30 Frazer, *The Magic Art and the Evolution of Kings*. Vol. I. P. 277. (The Golden Bough)

31 Frazer. op. cit. P. 277-278.

32 Frazer, *Taboo and the Perils of the Soul*. P. 154. (The Golden Bough)

33 Frazer, *The Magic Art and the Evolution of Kings*. Vol. I. P. 272-273. (The Golden Bough)

34 *Encyclopaedia of Religion and Ethics*. Vol. 10. P. 561.

35 op. cit. Vol. 10. P. 561.

36 Batchelor. *The Ainu and Their Folk-Lore*. P. 334.

37 Frazer, *The Magic Art and the Evolution of Kings*. Vol. I. P. 280.

38 董仲舒撰、春秋繁露、卷十六、求雨の條参照、此等文獻の例は龍が動物の形態を摸するに至つた徑路を別篇に於いて論ずる積りであるから此處では省略して置くこととする。

39 引用文は省いて、別篇「動物の形態を取つた龍の正體」の條に掲示することにするから参照されたい。

40 同上。

41 同上。

42 此の點に關しては何れ古代支那に於ける求雨、止雨の儀式を論ずることがあるから其處で詳論することにする。

⁴³ 山海經、海外北經、黑齒國の條。

⁴⁴ 史記、卷四、周本紀。

⁴⁵ 龍と蔡との關係に就いては、「動物の形態を取つた龍の正態の條で論ずることにする。」

⁴⁶ 淵鑑類函、卷四四九、蟲豸部守宮の條に引用された博物志の文は、「蜥蜴以器養之、食以硃砂、體盡赤、所食滿七斤、擲之萬杵、以點女人支體、終身不滅、偶則落、故曰守宮、」であり本文に引用したものとして少しく出入があるから參考に供して置く。

⁴⁷ 淵鑑類函、卷四三九、鱗介部蛇の條に引用してある異苑錄の文は、「圓陽鐘忠以元嘉冬日晨、行見有一蛇長二尺許、文色似青琉璃、有雙角白如玉、感而畜、於是資業日登、經年蛇自亡去、忠及二子相續殞、此蛇來去吉凶、其惟龍乎、」であるが此處でも少しく差異が認められるから參考に掲示して置く。

⁴⁸ 淵鑑類函、卷四三九、鱗介部、蛇の條參照。